

『琉球国旧記』の編纂

——『琉球国由来記』から『琉球国旧記』へ——

島村幸一

〈はじめに―王府編纂事業、

「番字」叙述から「漢字」叙述へ―〉

『琉球国由来記』（一七二三年）と『琉球国旧記』（一七三一年）は、琉球の地誌といえる編纂書である。これらは、正史『中山世鑑』（一六五〇年）や蔡鐸本『中山世譜』（一七〇一年）、蔡温本『中山世譜』（一七二五年）、『球陽』（一七四五年）とともに琉球王府の重要な編纂書である。

『琉球国由来記』（以下、『由来記』とする）は、『由来記』の序文「諸事由来記序」によれば「至_二 尚円王_一。而礼法大備矣。奈何文契未_レ盛。典記不_レ備。是故本国。凡 禁城諸公事。及毎年毎月。所_レ有儀式。其所_二由来者。至今無_レ從考稽_二焉_一」（尚円王の時代になって礼法は大_レ方備わったが、それを記すのは充分ではなく典記は備わってはいなかつ

た。それ故、当国には王城における公事や毎月ある儀式の由来は今に至るまで知ることができない）とあり、時の王が「旧規由来寄奉行 向維屏仲里按司朝英」、「同中取 穎徳安糸数親雲上恵秀 向維藩源河親雲上朝忠 向弘業宇久田親雲上朝遇」に「典記」の「大修」を命じ、命を受けた「臣等」は「竭_レ心励_レ力。恭攷_二御双紙_一。更尋_二遺老隠士_一。悉細問答。闕_レ疑存_レ信。新修_二典記乙冊_一」（精一杯力を尽くして、この双紙を作成するために遺老隠士に尋ね、細かく聞き出して疑わしいところは削り信ずるに足るものは残して、新たに典記を編集して、「上覧」した書であると記している。一方、『琉球国旧記』（以下、『旧記』とする）は、「序」に「康熙癸巳之冬。按司向維屏等。奉_二王命_一。用_二番字_一。著_二由来記_一。若_二山川旧跡。仏神寺社。五穀蔬菜。諸礼風俗。器用食物者。徵_二其原由_一。燦然備矣。而其所_二編輯_一者。多載_二和漢之事_一。或以_二繁冗_一。而不_レ適_二乎用_一。或以_二糠粃_一。而不_レ足_二乎伝_一」

(一七二三年の冬、按司向維屏等は王命を受けて番字を用いて由来記を記した。山川旧跡、仏神寺社、五穀蔬菜、諸礼風俗、器用食物については、その由来がはっきりと記された。しかし、編輯にあたっては多く和漢の事を載せて、時にはくだしく記して適せず、時には内容が乏しいものになって伝えるに足りない)とあり、時の王が特に鄭秉哲^{ていへい}に命じて由来記を改修することになったが、「経年已久。莫^も從稽^{てい}詳。爰博採^{えい}典籍。以為^い刪定。旁訪^{へい}遺老。以為^い參考。校^{てい}正舛誤。補^{へい}集缺少。以為^い全書。名^な之曰^い旧記」(年を経て既に久しいので詳しくは知ることができない。そこで広く典籍をあたつて明らかにし、また遺老に尋ねてそれを参考にして、由来記の誤りを正して不足は補つて完全な書とし、これを旧記と名付ける)と記している。

『旧記』の「序」は、『旧記』編纂の理由をその冒頭で「而其所以編輯者。多載^た和漢之事。或以^い繁冗。而不^ふ適^{てい}乎用。或以^い糠粃。而不^ふ足^{てい}乎伝」と記している。これは『由来記』編纂の所以を記した「是故本国。凡^い禁城諸公事。及毎年毎月。所^し有儀式。其所^し由来者。至^{いた}今無^な從考稽^{てい}焉」(序文冒頭の記事)に、貝原好古が編纂した『中華事始』『大和事始』『日本歳時記』が引用されていることを批判したものである。具体的には、「是故本国。凡^い禁城諸公事。及毎年毎月。所^し有儀式」は『由来記』の巻一「王城公事」にあたり、これに『中華事始』『大和事始』『日本歳時記』が引用されているのである。しかも好古の編纂書の引用は、『由来記』の巻三・四卷「事始 乾坤」にさら

に多く引かれている。^(註)確かに、なかには巻一「39 彼岸」(『日本歳時記』を引用)他や巻三「11 宮殿」(『中華事始』『大和事始』を引用)他には冗漫とも思える引用がされている。ただし、特に『由来記』の巻三・四卷「事始 乾坤」の叙述は、まず琉球の事物起源を記し、それに続いて『中華事始』『大和事始』の順に該当する箇所を引いて(二書に該当箇所がない場合は、どちらか一方の引用になっている)、琉球、中国、日本の事物起源を並列して記している。これは琉球の事物起源を中国と日本のそれに並列させる叙述法であり、しかも中国の事物起源を先に記するという叙述に、琉球の一定の自己認識が窺えて興味深い。それはともかくとして、『旧記』は序文で『由来記』のこの叙述を批判し、『由来記』巻一、三・四卷が引く『中華事始』『大和事始』『日本歳時記』を、『旧記』は悉く削除している(付表4、付表5参照)。

すなわち、『旧記』編纂の理由は、まずは「而其所以編輯者。多載^た和漢之事。或以^い繁冗。而不^ふ適^{てい}乎用。或以^い糠粃。而不^ふ足^{てい}乎伝」ということであるが、それに従うならば、これは『由来記』巻一や巻三・四についての限定的な批判にしかならないということになる。実は、『旧記』編纂の最大の理由は『由来記』が「番字」で記されていることだと考えられる。「番字」は「漢字」を正統な文字とするのに対して劣った国の文字、未開の土地の文字、すなわち仮名をさしていると考えられ、仮名が入った文(和漢混淆文)を意味しているよう。『旧記』巻三「30 長月御崇」には『由来記』が「悪鬼納言葉ニテ、御願

文」を記すのに対して、「其願文。皆以「番字」述_レ之。若用「漢字」正_レ之。恐失「本韻」。故不_二敢正焉_一」と記して「願文」を略すとする記事がある。この「番字」で記された『由来記』が漢文で記された『旧記』に「改修」される問題は、和漢混淆文を主体とする最初の正史『中山世鑑』を書き改めて、漢文体の正史、蔡鐸本『中山世譜』（一七〇一年）、蔡温本『中山世譜』（一七二五年）、『球陽』（一七四五年）が記されたことと一連の問題である。さらに、古琉球時代の王府が発給する平仮名書きの辞令書が、一六〇九年の島津侵攻以降になると次第に漢文の辞令書に変化する問題とも、軌を一にすると考えられる。^{（注）}蔡温本『中山世譜』の「序」には「伝至「質王」。恭逢「皇清定鼎」。文明益開。卒以「歴代事功。及祖德宗功。昭穆親疎之非」輕。特命「按司向象賢」。始用「番字」。著「中山世鑑一部」。然前代紀籍。頗致「湮没」。象賢深為_レ之嘆。既而貞王嗣立。斯文大明。如「日中天」。仍命「総宗正尚弘徳等」。改以「漢字」。重修「世鑑」。顔曰「中山世譜」とある。記事は、向象賢^{けいけい}による『中山世鑑』が「番字」で書かれ、向象賢は「前代紀籍」が「湮没」していることを嘆いていた。尚貞王の時代になり「斯文」（学問）が盛んになると、尚弘徳等が命じられて「漢字」によって、『中山世鑑』が「重修」されて『中山世譜』がなったというものである。『中山世譜』の「序」は、『中山世鑑』が摂政を勤めた「按司向象賢」が記したこともあり、『旧記』が『由来記』を厳しく批判するような文言はないが、代わりに『中山世鑑』を記した向象賢自身が史料の乏しいこ

とを嘆いたと記し、「斯文」が盛んになって漢文によって『中山世鑑』を「重修」したとしているのである。

琉球王府の編纂書が「番字」から「漢字」に切り替わるのは、ひとつの大きな流れである。これは、『旧記』の「序」が『旧記』編纂のスタッフを「纂修旧記当官姓氏」と記しているのに対して、『由来記』編纂のスタッフを「康熙癸巳始編番字由来記当官姓氏」としていることも、また蔡温本『中山世譜』の「凡例十条」でも『中山世鑑』の編纂のスタッフを「順治庚寅始編番字世鑑当官姓氏」とし、蔡鐸本『中山世譜』の編纂のスタッフを「康熙辛巳重修漢字世譜当官姓氏」としていることでも知れる。ただし、『由来記』にしても、その「序」や卷六「国廟・王陵」、卷九「唐宋旧記全集」、卷十「諸寺旧記」、卷十一「密門諸寺縁起」は漢文体で記されており、二十一巻の全巻が「番字」で記されていたわけではない。これも見逃せない点で、「地理見」（風水）や「漢文組立」の担い手であった卷六と卷九の唐宋（久米村人）や卷十の禅林・卷十一の密門の僧から提出された資料で構成された巻は、漢文で書かれている。『由来記』は各巻の元になった資料によって、文体が統一されていない書なのである。これが後に『旧記』によって漢訳されることを考えると、『由来記』もその一部は既に漢文によって記されていたともいえるのである。

琉球王府は、一六〇九年の島津侵攻から百年を経た十八世紀前後期から五十年程の間に集中して編纂事業を行う。一五三一年、一六一三

年、一六二三年の三回以上にわたって編纂された宮廷歌謡集『おもろさうし』や、一六五〇年に編纂された琉球王府の最初の正史『中山世鑑』を例外として、蔡鐸も編集にかかわる一六九七年の『歴代宝案』第一集、一七〇一年の蔡鐸本『中山世譜』、一七〇三年の『久米島仲里間切旧記』、一七〇五年の『八重山嶽々由来記』『君南風由来并位階且公事』、一七〇六年の『琉球国中山王府官制』『女官御双紙』、一七〇七年の『宮古島旧記（康熙四十六年本）』、一七〇九年の『那覇由来記』、一七一一年の『混効験集』、一七二五年の蔡温本『中山世譜』、一七四五年の『球陽』、同年『遺老説伝』等が、それである。一七一三年に編纂された『由来記』、一七三二年に編纂された『旧記』も、この一連の王府編纂事業のひとつである。琉球王府の編纂物が漢文化するのは、琉球王府の装いが中国化すると並行する問題であると考えられる。近世期の琉球王府は、中国の冊封国としての役割を積極的に担うことで、島津侵攻以降の王国の対島津、対幕府との相対的な自立性を確立・確保しようとしたと考えられる。

例えば、琉球王府の最大の「御規式」ともいえる正月元旦の「朝拝御規式」にオモロが謡われなくなり、中国からの渡来人をルーツとする久米村人による「祝文」が唱えられるのも、一連の流れである。^(注3) 近世期に入って王府儀礼に中華の礼を取り入れる点に限って、『球陽』から取り出してみると以下のものがみえる。

・ 卷6—364 尚質王十九年（一六六六） 毛榮清、貢物に瑪瑙等の物を献ぜざるを請奏し、且涼傘及び五方旗を帯び来る。
 ・ 卷7—438 尚貞王二年（一六七〇） 始めて正月人日・臘月念七日に奏樂することに定む。
 ・ 卷7—440 尚貞王二年（一六七〇） 始めて歳暮及び正月に諸僧入観するの時、庭樂を奏することを定む。
 ・ 卷7—448 尚貞王三年（一六七一） 始めて正月初一日より十五日に至るまで、番日に値ふ毎に、禁城中庭に在りて以て樂を奏することに定む。

『球陽』卷6—364は、「朝拝御規式」に中華の傘「涼傘」と「五方旗」を取り入れた記事で、これは前述した「朝拝御規式」でオモロが謡われなくなったことと繋がる。「朝拝御規式」については、この外、卷10—730「尚敬王七年（一一一九） 始めて元旦の祝位を殿庭の正北に定む」があり、これまでその年の「歳徳」の「方位」に応じて「天神地祇」を祈っていたが、祈る「方位」を「正北」に定めたという記事である。「正北」は、中国皇帝がいるとされる方角である。一七一三年に「上覧」された『由来記』卷一に記された「朝拝御規式」は、まだその年の「歳徳」の「方位」に向かって儀式が行われている。他は儀式に「樂」が奏されることになる記事である。「樂」は中国風の「樂」であるが（『由来記』卷4「24樂」に「中華より来たるか」とある）、この

記事も「朝拝御規式」にかかわる記事で、中華の礼が取り入れられている。この外、前述した記事の前後には巻6―388「尚質王二十年（一六六七）唐榮の楊春枝、閩に入りて、復、曆法を学ぶ」や巻6―394「尚質王二十年（一六六七）周国俊、已に地理の法を学ぶ」という記事がある。特に、後述する「地理」（風水）による国土の位置付けは、『旧記』の編纂においても重要である。

琉球王府の編纂書が「番字」から「漢字」に切り替わるのに当たって、重要な役割を果たしたのは中国からの渡来人（「三十六姓」）を始祖とする唐榮（久米村人）である。向象賢『中山世鑑』を「漢訳」して『中山世譜』を編纂した蔡鐸・蔡温父子も唐榮であり、「旧規由来寄奉行 向維屏仲里按司朝英」等の『由来記』を「漢訳改修」して『旧記』を記した鄭秉哲も唐榮である。琉球王府の主要な編纂書の編纂者は、首里士族から唐榮にその主体が移ったと考えてよい。

「鄭氏家譜（十三世鄭秉哲）」によると、鄭秉哲は父が「古波藏親方弘良」、「康熙三十四年」（一六九五）に生まれ、「乾隆二十五年」（一七六〇）に卒す。「康熙四十五年」（一七〇六）に「若秀才」として出仕、「康熙五十九年」（一七二〇）に「通事」となり「在留通事鄭国柱」に従って「習礼読書」のため渡清、足かけ三年「閩」で学び帰国、翌年の「雍正元年」（一七二三）に「講師」となる。その年の十月に「鄭謙」「蔡宏訓」とともに「官生」（国費留学生）となって再び渡清、「国士監」で足かけ六年学び「雍正七年」（一七二九）に帰国、再び「講師

師」となる。「雍正八年」（一七三〇）に「漢文旧記」「編修」を命じられ、翌年「中山世譜世系」を「纂修」する。その後、「雍正十年」（一七三二）と「乾隆四年」（一七三九）に「都通事」となって渡清、「乾隆七年」（一七四二）に「著作漢字公文職（俗称漢文組立役）」に任ぜられ、翌年首里に住まいを移す。「乾隆七年」の家譜記事にはこの職は「唐榮」には元々なかったが、初めてこれが置かれたことが記され、また「雍正八年」から「今年」まで「中山世譜及世系」を「続集」して「十三年」になり、「王妃姬紀」も「改正」したことも記している。さらにそれに続いて「球陽会紀」の「纂修」に入り、「甲子之冬」（一七四四）に「交代」するはずであったが「会紀」が完成していないので一年留任し、それでもできないのもう一年留任して、「丙寅十二月」（一七四六）に「交代辞職」したとある。その後、秉哲は「乾隆十三年」（一七四八）に「正義大夫」になって紫禁城を「朝見」し、また「乾隆十六年」（一七五一）には「儀衛正」になって江戸城を「朝覲」している。「乾隆二十年」（一七五五）には「総理唐榮司職」になり、同年「紫金大夫」に「乾隆二十三年」（一七五八）には「法司銜」（三司官座敷）に昇る。

「鄭氏家譜（十三世鄭秉哲）」では、なお明らかでない部分があるが、秉哲は蔡温本『中山世譜』附巻の編纂と『旧記』編纂に携わり、さらにいずれも唐榮出身である蔡宏謨、梁煌、毛如苞とともに『球陽』とその外巻である『遺老説伝』の編纂を行っている。『中山世譜』附巻の

編纂は、『旧記』編纂と同じ年の「雍正九年」（一七三二）である。「雍正八年」の記事「漢文旧記」「編修」を命じられるは、『旧記』編纂に携わった記事、翌年「中山世譜世系」を「纂修」するは『中山世譜』附巻の編纂にかかわる記事か。『球陽』『遺老説伝』の編纂は、それから十四年後の一七四五年である。「乾隆七年」（一七四二）の家譜記事に記される「王妃姫紀」「改正」に引き続いて始められたという「球陽会紀」の「纂修」は、この『球陽』と『遺老説伝』の編纂に携わったことを記した記事であろう。『球陽』と『遺老説伝』には何故かそれを記した担当官が書かれているが、『球陽』においては署名がある記事のうち、秉哲が記した記事は全体の七十一パーセントにもものぼるとい^{（注1）}う。『遺老説伝』については、巻一と巻二（都合九十四項目）と附巻の多く（都合十項目）が秉哲が記した記事で、全体の七十四パーセントにもなる。すなわち、『中山世譜』の第二次の附巻、『旧記』から『球陽』『遺老説伝』の王府編纂事業は、鄭秉哲が中心になってその事業を担ったといえるのである。琉球の士族は一般的には特定の業務に長く携わることがないといわれるが、秉哲は唐榮ということもあつてか、特定の業務に長い間携わってきた人物で、いわば王府編纂事業の専門的な存在であつたといえる。「乾隆七年」の家譜記事に記された「中山世譜及世系」を「続集」してその年になるまで「十三年」間というのは、秉哲が専門官的に王府編纂事業にかかわってきたことを物語る。「球陽会紀」の「纂修」を「交代辞職」したという一七四六年は、秉哲は五

十一歳。この間、二度程「都通事」になって渡清するが、少なくとも、この時期まで秉哲は、他の誰よりも王府の編纂事業にかかわってきた人物だつたと思われる。つまり、そのことは『中山世譜』附巻と『旧記』、『球陽』『遺老説伝』は、主に秉哲が担った編纂物であり、それらは繋がっている書であることを示^{（注2）}す。

和漢混淆文が漢文化するという問題は、いうまでもなく単に「番字」による叙述を漢訳するというのではない。『由来記』から『旧記』への「改修」は、例えば『由来記』が編纂の所以を「是故本国。凡禁城諸公事。及毎年毎月。所^レ有儀式。其所^二由来^一者。至今無^二從考稽^一焉」（序文冒頭の記事）と記して編んだ首巻「王城公事」を、『旧記』は巻頭には置かず巻三に置いている。『由来記』と『旧記』では、以下にみるように巻の構成の仕方、巻における項目の立て方、この外にも項目の削減（ウタの削除を含む）や加筆等があり、『旧記』は『由来記』を単純に漢訳した書ではないことは歴然としている。『由来記』の漢文化の問題は、単に『旧記』という漢訳された書が編まれたのではなく、新たな漢文による地誌が誕生したことを意味する。本稿は一七〇〇年前後から始まる王府の編纂事業を展望し、『旧記』を中心に据えて、『由来記』から『旧記』への変遷の枠組みを具体的にみようとするものである。

なお、『旧記』にかかわる先行研究は、多くはない。まず、『旧記』が初めて活字化されてそれが収められた横山重他編『琉球史料叢書』

第三卷、大岡山書店、一九四三年刊に入った伊波普猷「琉球国旧記解説」は、『由来記』各巻と『旧記』各巻との比較を簡単に指摘しているだけで（しかも正確ではない）、「解説」の大半は漢字表記に及ぶ問題を論じて、それから発展した「中村渠」「雲慶那^{なぐけな}」等の地名の語義に及んでいる論であり、『旧記』の編纂にかかわる言及がほとんどない。その後の『旧記』の編纂をテーマとする論は、玉城伸子「琉球国由来記」と『琉球国旧記』の編纂方法について「第四回「沖縄研究国際シンポジウム」世界に拓く沖縄研究」第四回沖縄国際シンポジウム実行委員会、二〇〇二年刊、呉海燕「琉球国旧記」の編纂特性について——『琉球国由来記』との比較を通して——『沖縄文化』第一〇一号、沖縄文化協会、二〇〇六年刊、波照間永吉「『古事集』——『琉球国由来記』と『琉球国旧記』の間にあるもの——『沖縄文化』第一一六号、沖縄文化協会、二〇一四年刊がある。呉論文は、『由来記』と『旧記』とを全般にわたり比較してその違いを論じている論ではあるが、本稿で問題にしているような十八世紀前後から始まる琉球王府の編纂事業を展望してはなく、現象的な違いを指摘するに留まり、それについて「中国側に琉球文化を総合的に紹介するため」というようなやや一面的な見解が示されている。玉城論文は『旧記』巻一とその典拠となった『由来記』とを比較した論であるが、そもそもの『旧記』巻一を取上げることが問題なのかが論じられていない。玉城論文も、王府の編纂事業全般を視野に入れていないのである。波照間論文は、『由来記』と

『旧記』とを繋ぐ鎌倉芳太郎資料にある『古事集』を解説した論で、注目される。『古事集』は『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇Ⅱ） 民俗・宗教』に収録されている資料で、「評定所丑日 尚侯爵家所蔵本」という表書きがあることから琉球王府が作成した資料であると考えられる。『古事集』については必要の範囲でふれるが、まさに「『琉球国由来記』と『琉球国旧記』の間にある」資料と考えられる。『旧記』がにわかに出現した書ではないことが分かる。なお、一般に活字化されていないが木村淳也が二〇一〇年度に明治大学に提出した学位請求論文『球陽外巻 遺老説伝 本文と研究』に収められた「第二部 遺老説伝 本文の特性と背景」第二章「由来」から「旧記」へ——地方記事編纂における『琉球国旧記』の態度——は、『球陽』の外巻の『遺老説伝』をテーマとするものだが、王府の編纂事業を視野に入れた本格的な『琉球国旧記』論だといえる。

〈『旧記』の構成、『由来記』との比較〉

付表1をみるように、『旧記』と『由来記』では巻の順序や構成が違ふことは歴然としている。『由来記』は全二十一巻、一方の『旧記』は全九巻、附巻十一巻という構成である。しかも、『旧記』巻五「古城関梁」や附巻四「泉井」、巻五「江港」、巻十一「風俗」等は『旧記』が独自に立てた巻で、一部対応する項目がみられるが、巻としては『由来記』に対応する巻がない。これだけみても、『旧記』が『由来記』を

単純に漢訳した書でないことは明らかである。

附卷が立てられた王府の編纂書は、「番字」で記されたとされる『中山世鑑』や『由来記』ではなく、蔡鐸本『中山世譜』が最初である。

蔡鐸本は、附卷で尚豊王の「第一王子」尚恭と、同じく尚豊王の「第二王子」尚文の「紀」を記している。注目すべきは、尚文の「紀」には父尚豊の冊封を受けて、尚文（佐敷王子）が島津光久に率いられて、京都で徳川家光に謁見する記事が記されていることである。続く蔡温本も附卷（第一次）で尚寧王の父尚懿と尚豊王の父尚久の「紀」を記している。これらは国王とはならなかった人物で、正巻では記されていない人物である。蔡温本『中山世譜』はさらにそれから六年後の「雍正九年」（一七三二）に、鄭秉哲が本格的な附巻を編集して、これが仕次されて最終的には七巻になっている。「雍正九年」は前述したように、『旧記』が編纂された年でもある。秉哲はこの年に、蔡温本『中山世譜』の第二次の附巻と『旧記』を編纂したのである。ここで特筆すべきは、秉哲が作成した附巻は蔡温が序文を書いた「雍正三年」の『中山世譜』の附巻のような正巻の補足的な附巻ではなく、薩摩・日本関連の記事を集めて編纂した内容を記した巻を編み、これを附巻としたことである。秉哲が記した『中山世譜』附巻の「序」には、「昔向象賢。奉王命。始用国字。著中山世鑑。蔡鐸改以漢字。命之曰世譜。此時。別摭其所係乎薩州之事。以附世譜。謂之附巻」（かつて向象賢が王命を奉じて国字を用いて始めて『中山世鑑』

を記した。しかし、蔡鐸はそれを改めて漢字で記し『中山世譜』とし、別に薩摩にかかわることを拾ってそれを附巻にした」と記している。ただし、秉哲のいう蔡鐸が「別摭其所係乎薩州之事」とは、前述した尚文が島津光久に連れられて京都で徳川家光に謁見したことをいうのであろうが、果たして蔡鐸本の附巻が薩摩・日本にかかわる記事を別立てにした編纂を目指していたかは不明である。蔡鐸本の附巻が記す尚恭や次の蔡温本附巻が記す尚懿、尚久の「紀」に特に島津・日本関連の記事はみられない。蔡鐸本の附巻の「序」は、尚恭・尚文には不幸にして後を継ぐ者がなく「譜」がなければ後世、「考稽」することができない。それで「譜紀一卷」を「新修」して『中山世譜』の末に「附」したと記している。蔡温本の附巻の「序」も同様で、特に薩州関連を取り上げて編纂するという叙述はない。秉哲は、敢えて蔡鐸本『中山世譜』附巻の尚文の「紀」を例にして、新たな附巻を編纂することを根拠付けたのではなかったか。それはともかくとして、このような附巻を持った『球陽』と『球陽』の外巻である『遺老説伝』も、それを引き継ぐ。この附巻の変化は、琉球王府の正史の編纂のあり方として重要である。王府の正史は最終的には、薩摩を含めた日本関連の記事を除くかたちで正巻にして、日本関連の記事を附巻にまとめる二本立ての編纂したのである。秉哲が編纂した『中山世譜』の附巻は、「尚清王」代と「尚永王」代の僅かな記事がみられるが、基本は島津侵攻の直前、「万曆十九年」（一六〇七）の「尚寧王」代の記事から

始まる。そして、『球陽』の附卷は「尚寧王十二年」（一六〇〇）から始まるのである。これが、「番字」で記した正史から漢文で記した正史に転換した琉球国の正史の帰結した姿ともいえる。

『中山世譜』や『球陽』に附卷が立てられたのは、従来から冊封使から日本関連の記事を隠すためというような言説があるが、それが第一にあったのか。第一にあるのは、中国の冊封国である琉球国の正史として、王府は正巻に琉球と中国に関連した記事を置き、附巻に薩摩・日本と関連した記事を置くという形式の正史を編纂したと考えた方がよいのではないか。それが「番字」から漢文による叙述の変化なのである。『由来記』巻三・四「事始」の『中華事始』と『大和事始』の引用順序が、決まって『中華事始』が先に引かれていたことが想起される。それはともかく、王府の編纂が当初は首里士族の向象賢によって始められ、次の正史『中山世譜』は唐榮（久米村人）の蔡鐸・蔡温父子が担い、同じく唐榮の秉哲が『中山世譜』附巻の本格的な編纂に携わり、『旧記』『球陽』『遺老説伝』を担っていった。ただし、秉哲は蔡鐸・蔡温父子が記した附巻とは質を異にする附巻を編纂したのである。

そう考えれば、『旧記』の附巻は正巻を補足する性格の巻ではなく、当初から正巻と附巻によって構成された書と理解した方がよい。附巻巻一は「神殿」、巻二は「神軒」、巻三は「嶽 森 威部」、巻四は「泉井」、巻五は「江港」、巻六は「官職」、巻七は「官爵」、巻八は「火神」、巻九は「鐘銘」、巻十は「郡邑 郡邑長 駅」、巻十一「風俗」で

ある。附巻一「神殿」は、『由来記』巻十二、十三、十四、十八「各処祭祀」から「殿」「トノ」を抽出し漢訳した記事、附巻二「神軒」が『由来記』巻十二、十三、十四、十五の「各処祭祀」から「根屋」「神アシアゲ」を抽出し漢訳した記事、附巻三は「嶽 森 威部」が『由来記』巻五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」、巻八「那覇由来記」（ただし、対応が不明）、巻九「唐榮旧記全集」、巻十二、十三、十四、十五、十九、十八、十七、十六、二十一、二十の「各処祭祀」から「嶽」「森」「イベ」を抽出し漢訳した記事である。すなわち、『旧記』の附巻巻二から巻三は、『由来記』巻五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」、巻八「那覇由来記」、巻九「唐榮旧記全集」、巻十二以下の「各処祭祀」から、「殿」「トノ」「根屋」「神アシアゲ」「嶽 森 威部」を分類抽出して漢訳した巻である。

さらに、附巻四「泉井」、附巻五「江港」は一部の項目に対応する記事があっても、『由来記』に直接対応する巻はなく、新たに『旧記』が記事にした巻である。附巻六は「官職」が『由来記』巻二「官爵列品」のうち「諸御殿並三司官従官定之事」から抽出した記事、附巻七は「官爵」が『由来記』巻二「官爵位階職之事」から抽出した記事で、『由来記』巻二を二つの巻にしている。附巻八「火神」は、『由来記』巻五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」、巻十二、十三、十四、十五、十六、十九、十八、十七の「各処祭祀」から「火神」を抽出し漢訳した記事である。これは、前述した附巻一から附巻三と合わせると、『旧記』は

四巻にわたって「各処祭祀」等の記載を分類して附巻を記していることになる。附巻九は「鐘銘」が『由来記』巻九「唐榮旧記全集」、巻十「諸寺旧記」、巻十一「密門諸寺縁起」から「鐘銘」を抽出した記事、附巻十「郡邑 郡邑長 駅」は、「郡邑長」が『由来記』巻二「諸間切諸島夫地頭・設理・ヲエカ人事」から抽出した記事であるが、「郡邑」「駅」は『由来記』から抽出した記事ではなく『旧記』が新たに記した巻だと考えられる。附巻最後の巻十一「風俗」は、内容が『由来記』巻一「王城公事」と巻十二以下の「各処祭祀」にある該当部分を合わせたような記事であるが、これも『旧記』が新たに記した巻といえる。前述したように、正巻の巻五「古城 関梁」、附巻の巻四「泉井」、巻五「江港」、巻十の一部「郡邑長」「駅」、巻十一「風俗」は新たに立てられた巻で、地誌『旧記』が記載項目として特立した巻であるといえる。これは、前述した木村論文でも指摘されているが、『旧記』編纂に先立つ六年前に編纂された『渡嘉敷間切由来記』（一七二五年）の冒頭に記された以下の「覚」と見合う。「覚」は、『渡嘉敷間切由来記』を提出するにあたって系図座が渡嘉敷親雲上^{とかしとべいちゃん}に宛てたもので、『旧記』の資料になる「地方旧記」を作成する指針を記していると考えられる。

一、各間切中、往古より有来候城主何某、何代相保、為何某滅られたる段、又者、嶽々、村中之旧式、由来等、委細可^レ被^二書出^一候事。

一、旧式又者由来有^レ之候井川、右同断。
一、間切中の為、勲功有^レ之人、右同断。
一、跡々より間切中に新敷出来、又者奇妙成事共、右同断。

すなわち、『旧記』巻五「古城」は「覚」の第一条の「往古より有来候城主何某、何代相保、為何某滅られたる段」と対応する巻であり、附巻の巻四「泉井」は第二条の「由来有^レ之候井川」であるが、附巻に由来が記されないことを考えると『旧記』が『由来記』によらない項目として新たに立てた巻六の「7 真嘉戸井」「41 無漏溪」「42 轟溪」がそれにあたると考えられる。さらには、『旧記』巻一で「首里記」の最後にやや唐突とも思えるかたちで付いていた「26 自了」や巻六「46 勝連郡儀保掟」「52 健堅大親」の『旧記』が新たに立てた項目も、「覚」の第三条「間切中の為、勲功有^レ之人」と対応する記事であったと考えられる。つまりは、『旧記』が新たに立てた正巻、附巻、および項目は、『渡嘉敷間切由来記』（一七二五年）の冒頭に記された「覚」をふまえ、これを拡大するものであったと考えられる。波照間論文が紹介した『古事集』が記す項目（沿革・「勝形」・「山川」（御嶽・川・井泉）・「火神」・「土産」・「関梁」（橋・宿駅）・「古蹟」・「神社」・「陵墓」・「馬場」・「人物」・「列女」・「風俗」・「祭祀」等）も、「覚」の延長、もしくは関連するものであり、『旧記』が新たに立てた巻や項目に繋がっている。

ところで『旧記』の正巻の叙述をみると、確かに多くは『由来記』にその由来が記されている「御嶽」「旧跡」等を正巻に載せ、それ以外を附巻にまわしていることが分かる。^(注6)しかし、まず大事な点は『旧記』の附巻は正巻の補完としてあるのではなく、『旧記』は編纂基準によって正巻と附巻に分類し、必要な巻を正巻と附巻にそれぞれ新たに立てて再編纂した書であるということなのである。『旧記』の分解・分類する眼差しといったものは、『由来記』がとりあげなかった地誌「泉井」「江港」「郡邑長」「駅」「風俗」等を加筆させたともいえる。ここで、『由来記』巻十二「各処祭祀一」に対応する『旧記』巻六の前半部を例にして、『由来記』から『旧記』へ巻の項目がどう取られているかをみていく。『由来記』巻十二「各処祭祀一」に対応する箇所は、『旧記』巻六の前半部の「1 崇元寺嶽」から「11 中瀬社宮」、及び「19 嘉手志川」から「21 宮里嶽」までと「28 王農大比屋」の都合、十五項目である。『由来記』巻十二の巻頭の「目録」は、以下のような記載になっている。

一 真和志間切

①安里村（崇元寺御嶽由来）↓巻12—25「崇元寺之嶽」↓『旧記』

巻6—1「崇元寺嶽」

②茶湯崎村（内金城小嶽由来及指帰橋並碑文由来）↓巻12—37「同（内金城）小嶽」・39「指帰橋」↓『旧記』巻1—15「内金城小

『琉球国旧記』の編纂

嶽」・巻5—9「指帰橋」

③安謝村（銘刈子有_二祠堂_一）↓巻12—38「銘刈子祠堂」↓『旧記』巻6—2「茗刈子祠堂」

一 豊見城間切

④豊見城村（五月四日、三爬龍詣_二于豊見瀬嶽_一）↓巻12—82「城内豊見瀬嶽」・83「ホバナ嶽」・84「ヒラ、ス嶽」↓『旧記』巻6—3「豊見瀬嶽・穂花嶽・平良瀬嶽」

⑤瀬長按司旧跡↓巻12—108—1「旧跡」↓『旧記』巻5—4「瀬長城」

一 小禄間切

⑥儀間村（メイノスミ神社住吉大明神社）↓巻12—179「メイノスミノ事」↓『旧記』巻6—8「箕隅宮」

⑦大嶺村（土地公有_二石堂_一）↓巻12—181「土地公」↓『旧記』巻6—10「土地君」

一 兼城間切

一 高嶺間切

⑧屋古村（嘉手志川由来）↓巻12—272「嘉手志川」↓『旧記』巻6—19「嘉手志川」

一 真壁間切

⑨真壁村（真壁按司兄弟之旧跡）↓巻12—331「神社」↓『旧記』巻6—20「真壁神社」

⑩ 真栄平村（移祠・腓城髑髏、両説アリ）↓巻12―332「宮里嶽」
↓『旧記』巻6―21「宮里嶽」

一 摩文仁間切

⑪ 米次村（米次按司由来）↓巻12―402―1「旧跡」↓『旧記』巻5―3「米次城」

一 喜屋武間切

『由来記』巻十二は巻頭の「目録」で十二項目（②は二項目）をあげて、その由来が記されている記事を記している。『旧記』もそれを受けてすべて正巻に記し、多くを巻六「島尻」で記事にしている。しかし、巻六で記しているのは八項目で、巻五に三項目、巻一に一項目というように分散して叙述している。その分散して記したひとつに新たに立てた巻五に記した項目がある。つまりは、『旧記』には『由来記』巻十二に対応する記事が都合十五項目あるが、『由来記』巻十二の巻頭の「目録」を受けた記事は八項目のみで、あとの七項目は『旧記』が項目を立てた記事である。「4 取_三稲穂_二以献_三按司_一」「5 献_三麦稻穂_二」「6 小岡碑」「7 真嘉戸井」「9 住吉宮」「11 中瀬杜宮」「28 王農大比屋」が、『由来記』の「目録」にない記事であるが、「4 取_三稲穂_二以献_三按司_一」は『旧記』が記す位置を誤った可能性がある記事で、本来は「佐敷郡」関連の記事「23 場天巫火神」前後に位置すると思われる。これを除いた六項目のうち五項目は、『由来記』に記された記

事に基づいて『旧記』が項目にしているのである。このうち、「28 王農大比屋」などは『由来記』が割注で記した記事（巻12―59「奥之大ヒヤ之殿」）を、『旧記』は本文として項目に立てている。さらに「7 真嘉戸井」は、『由来記』には見当たらない記事で新たに立てた記事である。しかしこれは、『古事集』「島尻 真和志郡」にはほぼ同様の内容の記事が記されている。また、『由来記』の⑤「瀬長按司旧跡」⑪「米次村（米次按司由来）」は、『由来記』や『古事集』には僅かな記述しかないが、それを『旧記』が巻五「古城」の中で大きく膨らませた叙述をしている。すなわち、『旧記』の正巻にある記事は『由来記』において由来が記された記事を取上げているということができるが、そればかりではなく積極的に由来を叙述する姿勢があるということである。実は『旧記』のこの姿勢が大事な点で、これは『球陽』や『遺老説伝』の叙述に繋がっていくことになる。前述したように、いずれもこれらは鄭秉哲が編纂している書である。

『旧記』正巻の構成は、付表1にみるように『旧記』の巻の排列順序は『由来記』の排列順序と対応していないが、『由来記』が構成する王府の中心から周辺へという記載秩序をふまえていない。^{（巻7）}それをよく示すのは、『旧記』巻七「寺社」が巻六「島尻・中頭・国頭」と巻八「久米嶋・馬齒山・葉壁山」、巻九「宮古山・八重山」との間に入っていることである。『由来記』の巻の構成からいえば、『旧記』巻七「寺社」に対応する『由来記』の巻は、巻十「諸寺旧記」と巻十一「密門諸寺縁

起」である。『由来記』では、この巻は地方の祭祀等を記した巻十二以下に「各処祭祀」の前に排列されている。『由来記』は、王府の中心及びその周縁にある「町方」と、王府の周辺である「地方」とを区分する排列をしているのである。対して、『旧記』は『由来記』の巻十二以下を分断するかたちで、沖縄本島各処の祭場、拝所、遺跡関連等を記した巻（『旧記』巻六）と、久米島を含めた沖縄本島周辺離島と宮古島・八重山各処の祭場、拝所、遺跡関連等を記した巻（『旧記』巻八と巻九）の間に置く排列をしている。さらにもう少しいえば、『旧記』の「地方」の叙述順序が、巻八「久米嶋 馬齒山 葉壁山」の叙述順序になっている点も『由来記』とは異なる。『由来記』は、「葉壁山」（伊平屋島、巻十六）、「馬齒山」（座間味間切・渡嘉敷間切、巻十八）、「久米嶋」（巻十九）という排列順序であり、『旧記』は沖縄本島以外の各処の叙述にあたっては、久米島（具志川間切・仲里間切）を優先させる排列をしている。これは、附巻卷三「嶽 森 威部」や附巻卷八「火神」の叙述にも見られる（ただし、附巻八は「久米嶋」の前に「葉壁山」の叙述がある）。

ただその一方で、巻毎にみれば巻一や巻六等の一部の巻を除いて、『旧記』に立項された項目は、対応する『由来記』の巻の項目順序に従って抽出するかたちになっている。その点では『由来記』の巻内部に貫かれている王権の中心から周辺へという項目の記載秩序は、『旧記』においても踏襲されているといえる。もともと分かり安いのは、

付表3の『旧記』巻二「官職 廢官 知行」、付表5の『旧記』巻四「事始記」等で、これらは項目に付された番号をみても分かるように、『旧記』が新たに立項した項目（巻二「48 講談師並読書師」等、巻四「11 帯類」等）や『旧記』が『由来記』の項目を取らなかったケース（『由来記』巻二「55 秀才」等、巻三「3 市」・巻四「3 耕」等）を除いて、『由来記』の項目の順序に従って立項している。巻毎の項目の削除、加筆の詳細な検討は今後の課題であるが、『旧記』が新たに立項した巻二「48 講談師並読書師」は、鄭秉哲自身が二度「講談師」（「講解師」）になっており、自らが就いた「官職」を追加していることが分かる。また、巻四「11 帯類」は『由来記』が落とした項目を立てて詳しくしたと思われる。『旧記』が追加した項目の中には、『由来記』編纂以降の年紀が記される「69 石炭」（「雍正九年」の年紀）もあり、新しい事物の起源を記そうとした姿勢も窺える。いずれにしても、『旧記』が新たに立項した項目や『由来記』からとらなかった項目の具体的な検証は、『旧記』の内容を知る上で重要であり、今後の課題である。

前述したように、『旧記』は附巻の存在も含めて、『由来記』の巻の順序や構成を変えて編纂した書である側面が強い。それが強くあらわれているのは、『旧記』巻一であろう。『旧記』は『由来記』が序文で編纂の理由とした「王朝公事」にあたる巻一を巻三に退けて、『由来記』の巻五「城中御嶽併百里中御嶽年中祭祀」、巻六「国廟・王陵」、

卷十二「各処祭祀一」、卷七「泊村由来記」、卷八「那覇由来記」、卷九「唐栄旧記全集」にあたる記事を首巻にして、「首里記」「泊邑記」「那覇記」「唐栄記」を叙述しているのである。『旧記』巻一をみるのが、最も『旧記』編纂の姿勢を知ることになるといえる。以下では、『旧記』巻一の叙述を巻の構成と記載の形式から述べてみる。

〈『旧記』の叙述―巻一を例として―〉

『旧記』の巻頭、第一巻の構成は、「首里記」「泊邑記」「那覇記」「唐栄記」で構成されている（付表2参照）。「泊邑記」「那覇記」「唐栄記」の順序は、『由来記』の巻の順序、卷七「泊村由来記」卷八「那覇由来記」卷九「唐栄旧記全集」に対応している。さらに、それぞれの項目は『由来記』の項目を抽出するかたちで、項目が多い「那覇記」に例外がみられるものの、『由来記』各巻の項目の順序に概ね従って立項されている。この点は、前述した『旧記』の他巻の叙述のあり方とかわりはない。しかし注目すべき点は、卷三「事始 乾」、卷五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」等からの記事をとって、『由来記』のどの巻にもない「首里記」が巻一の冒頭に新たに立てられている点である。しかも、その前半は『由来記』巻六「国廟地理記」「王陵地理記」を繰り込み（6附 地理記」「9附 地理記）、それに加筆して『由来記』にない新たな項目「1中山城」「2国殿」「3南殿」「4北殿」「5世誇殿」「6附 地理記」「7坊陵」「8玉陵」「9附 地理記」「10東宮」が

立てられている。『旧記』のこの立項は、全く同じではないが前述した『古事集』に既に示されていて、『古事集』「首里三州」「宮殿」には「国殿」「西之御殿」「南之御殿」「御書院」「大美御殿」「東宮」「汀志良次御殿」「国妃殿」という項目があり、「大美御殿」以外はそれについての由来が記されている。『旧記』の「首里記」は、『由来記』巻五や巻十二の「御嶽」や「祭祀」の記事をとって立てられた記事ではなく、『由来記』巻三・四「事始」乾坤の冒頭に記される「天地門 1城」や「11宮殿」等の記事を特立させて、泊村、那覇、久米村という「町方」の筆頭に立てられた王府の中心、首里城とその「地理」（風水）、及び王陵とその「地理」（風水）等を叙述した新たな項目群なのである。ここでは、風水による見立てを記した「地理」の叙述は重要なことで、「那覇記」にはみえないが「泊邑記」にも「28附 地理記」があり、『唐栄記』でも「70 唐栄」が「地理記」といえる内容になっている。

また、『旧記』には「首里記」以外にも新たに立てられた項目（24同楽苑」「26 自了」「82 啓聖祠」）や加筆がある項目（12 園比屋武嶽」「77 内金宮森」）がある。このうち「康熙五十七年」（一七一八）の年紀が記される「82 啓聖祠」は、『由来記』編纂以降に建てられた「祠」を記事にしており、『旧記』が新たに立項しているが、『古事集』の「唐栄府」の「祠廟」にはほぼ同様の記載があつて、『古事集』において既に記された項目であることが分かる。同様に「24 同楽苑」も『古事集』「首里三州」の「苑囿」に記されており、ほぼ同じ叙述の

記事である。注目すべきは、「26 自了」「12 園比屋武嶽」「77 内金宮森」の記事である。「26 自了」は「始生口唾」で「画」に秀で、「王愛之」、一六三三年に来琉した「冊封使行人」「杜三策」に「称賞」されたが、病い無くして突然亡くなったとある。「自了」の作品「白澤之図」は今日でも残っており、琉球を代表する画家である。これが「首里記」の最後に記されている。個人の記事が項目として特立して取上げられている特異な項目である。「26 自了」の記事は前述したように、「渡嘉敷間切由来記」の「寛」に記される「勲功有之人」として、『旧記』が加筆したと理解される。ただ、記事の最後は「葬三日後。塚開戸脱。唯余空棺・衣履」。異香繚繞不散。嗚呼真為異人之骨格一矣」というように、「自了」を戸解仙として記しており多分に伝説的な人物として記している。^(注)「自了」については、『由来記』巻四「画工」の中に「欽姓家譜」を引く記事がみえるが、『旧記』の記事のような戸解仙の叙述はない。しかし、これも『古事集』『首里三州』『西』の「人物」の中に『旧記』の記載と同様な記事があるのである。『旧記』の「自了」の叙述は、『由来記』の叙述に比べると伝説化していることは明白であるが、それは『古事集』からそうなっており、これが『旧記』を介するかたちで『球陽』巻四一二五六に入る。

同様に「12 園比屋武嶽」の「附」として加筆された「遺老伝」も、さらには「77 内金宮森」に加筆された「日本山城国人」である「重温」が会ったという「弁財天女」の記事も、『旧記』を介するかたちで

『球陽』に入る。「重温」が出会った「弁財天女」から「数銭」で買ったという「炬」が黄金で、それに「謝」するために建てた宮が「内金宮」であるという由来譚は、琉球の神女を「弁財天女」として捉えた袋中の『琉球神道記』以来の枠組みの中にある叙述だと理解される。

「弁財天女」にかかわる叙述は、その後一七〇七年の『宮古島旧記』（康熙四十六年本）（『御嶽由来記』）の「漲水御嶽」や一七一一年の『混効驗集』の「序文」、「由来記」巻十「天徳山円覚禪寺附法堂」の「肇創」弁財天女堂「記附再修事」へと引き継がれる。^(注)『旧記』が加筆した「77 内金宮森」の「弁財天女」の記事も、この流れの中にある伝承を記した記事である。「12 園比屋武嶽」の「附」は、国王を捕らえ王位を奪おうとする企てを知らせ、その後「清風」と化して消えた「一老翁」の記事である。これが『球陽』巻七―四五七に入る。この記事は、『由来記』巻一の「16 三月初行幸」に割注で記される「古老伝説」「ソノヒヤブ御拝ノ由来」として記されるものを、『旧記』は「12 園比屋武嶽」の「附」に「遺老伝」として記し、また『旧記』巻三「16 正月初三日行幸於三寺」でも割注のかたちで「遺老伝」として記している。「77 内金宮森」は、「日本山城国人」がかかわる記事であるために『球陽』附巻2―72に入る。『旧記』が付加・加筆した記事にこのような説話的な記事があり、しかもそれが『球陽』に採られるのは興味深い。前述したように、『旧記』は『由来記』に記される伝承的事を引き継ぎ、また新たに伝承の記事を加筆する傾向がある。それら

が、『球陽』と『遺老説伝』に引き継がれる。

『旧記』巻一の構成は、王府の中心である「首里記」を新たに冒頭に立て、以下に琉球国の「町方」である泊村、那覇、久米村を記した「泊邑記」「那覇記」「唐栄記」を叙述している。『由来記』の首巻は、王城年間の祭祀・公事の起源と祭祀・公事の執行を記した「王城公事」であったが、『旧記』はそれを首巻にはせず首巻は琉球の空間的な中心部の叙述をしているのである。これは『旧記』が「地理」（風水）による見立てを重視した叙述をしていることと関係することはいうまでもない。「地理」（風水）は、まさに唐栄が中国から取り入れた知識である。

この点が、『旧記』と『由来記』の大きな違いである。二つの書はともに王府の中心から叙述を始めるにしても、その中心を王府の祭祀・儀礼の起源とその執行の叙述から始めるのか、王府の空間的中心地の起源・由来から始める叙述をするのか、という明らかな違いがある。『旧記』は総じて祭祀の執行についての叙述についての関心が薄く、『由来記』が記した祭祀・公事の執行の記述を『旧記』は削除する傾向がある。そのことは、『由来記』巻十二以下の巻の表題である「各処祭祀」という表題が『旧記』の表題にないことでも知れる。そして、これは『旧記』が『由来記』の首巻に置いた巻を、巻三に退けた姿勢と繋がっている。

具体的な例をあげれば、「首里記」に一部がとられた『由来記』巻五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」をみると、『旧記』巻一の「11 真

王城嶽（在京内）。神名曰玉及宮之威部） 首里森威部（在京内。

奉神門外）」に対応する記事が、『由来記』巻五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」の前半にある「御城中御日・御月・火神・御嶽之事」の「10 真玉城ノ御嶽 神名 玉ノミヤノ御イベ」「6 キヤウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ」であると推定されるが、10と6を含む「城中御嶽」を記した「1 御日・御月ノ御前」から「13 アカタ御ヂヤウノ御嶽 神名 アガルタケ押明森ノ御イベ」の後に記される「毎歳、正月百人、二月長月、三月百人・四品・四度、四月百人、八月百人、四品・四度、九月二百人祈願之時、從内殿、下玉フ。御劍・御玉備へ、三平等大阿武志良礼、御崇アリ。聞得大君御殿御火鉢ヨリ始テ、首里殿内、御城内御火鉢、御タウグラ火神、嶽々、並ソノヒヤブ御嶽・国中城御嶽御イベノ前ニテ御拝終也（以下、省略）」を、『旧記』は記していない。この記事は10と6を含む「御城内」の「嶽々」で執り行われる祭祀の記事であるが、『旧記』はそれを叙述しないのである。この傾向は、『旧記』全体にわたっている。実は『由来記』に比べ『旧記』があまり利用されて来なかったのは、『旧記』が『由来記』を漢訳しただけの二次資料だという認識があったこと以外に、重要な王府の祭祀を欠いた書であるという認識があったからである。^(注10)

一方、『由来記』全二十一巻は、首巻の「王府公事」と巻五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」で王府中枢の祭祀・儀礼の由来とその執行を記し、それを受けるかたちで巻十二以下の「各処祭祀」で地方の「祭

祀」を記している。『由来記』は、琉球の祭祀の叙述に高い比重を置いている。しかし、『旧記』は必ずしもそうではなく、そのことが『旧記』が『由来記』に比べて分量がすくないことの要因のひとつになっている。『旧記』と『由来記』の二つの書の性格は、『旧記』の首巻の叙述中によくあらわれているといえる。

さらにもうひとつ、二つの書の違いがよくあらわれているのは、『旧記』には叙述の形式といえるものがみられることである。これは各巻の項目の記事冒頭に、それが始まった年紀（あるいは、典拠）を記すことから始める形式である。各付表（付表2〜付表10）の備考は、『旧記』の各巻の項目の冒頭の叙述が年紀、もしくは典拠から始まるものをまとめている。各付表（付表2〜付表10）から分かるように、付表4（『旧記』巻三）を除いてすべての巻の項目のほとんどの冒頭の叙述は、年紀やその典拠から始まっている。これが、『旧記』の叙述の特徴といえることができる。これを、『旧記』巻一「那覇記」冒頭とそれに対応する『由来記』巻八を例として以下に記す。

『旧記』巻一「那覇記」

34 那覇

往昔之世。吳氏我那覇宅。有_二怪石_一。形如野孤_一。（俗曰_二奈波_一）而人家自_レ此而始。遂以為_レ邑。因称_二此地_一。曰_二奈波_一。其韻与_二那覇_一相似。後又改_二字那覇_一。然其石。沈_二没土中_一。而今不_レ得_レ見焉。（琉球神

道記曰）（以下省略）

35 唐船堀

往昔之世。於_二此地_一。修_二造貢船_一。且。貢船自_二中華_一回来。即放_二在貢船_一于此塘。以防_二風濤_一。故名_レ之。曰_二唐船堀_一。又一説。嘗恐_二倭兵入国_一。鑿_二斯池塘_一。築_二建板橋_一。以為_二要地_一。欲_二于渡地布_レ陣。拒_レ敵云爾。未_レ知孰是。渡地有_二妓女_一。人欲_レ到_二其地_一。当_二至其橋_一。皆所_二思慮踟躕_一。不_レ敢輕進。故名_レ之。曰_二思案橋_一。

36 三重城

往昔_二那覇邑_一。有_二王農大親者_一。常遊_レ此。以觀_二光景_一。亦恐_二為_レ賊兵見_レ掠劫_上。高築_二雉堞_一。以備_二防禦_一。其橋三座。一曰_二大橋_一。一曰_二中橋_一。一曰_二沖橋_一。内有_二大中二橋_一。原為_二板杠_一。

康熙三十三年甲戌。七月十三日。偶有_二大風_一。而潮水湧漫。時為_二海潮所_レ破。尽成_二平沙_一。（以下省略）

『由来記』巻八「那覇由来記」

1 那覇由来記

抑、那覇ノ濫觴ヲ尋ルニ、今ノ吳氏我那覇、居宅ノ屋敷ノ内ニ、当初石有_レ之。形茸ニ似タリ。茸ヲ世俗ニ、ナバト云故ニ、此所ヲ人呼テ、ナハト云倣ケルガ、人家此所ヨリ、始リケレバトテ、則コノナハヲ取テ、里ノ名トシ、後ニ那覇ト字ヲ改ケルト云リ。然ルニ、此石、今ハ土中ニ埋テ、不_レ見得_二也_一。琉球神道記曰。（以下省略）

5 唐船堀ノ事（附シアン橋ト云事）

当初、薩府之御手ニ入ケル印トテ、此堀ヲホラセ給フトゾ。自然叛逆ノ企モアラバ、渡地ノ地ヲ陣所ニ構ンガ為メノ用意ノ堀ト云説アリ。然ドモ、其儀未_レ詳。後ニ此所ニテ渡唐船ヲ作シ故ニ、唐船堀ト云トゾ。（以下省略）

2 三重城（向_二西海_一崇所有）且大橋・中橋・冲道、修理之事

此三重城ハ、ワウノ大比屋城ト云。往昔、彼人遊觀之地ニテ、異賊襲来、為_二防御_一、如_レ城築ケル。年代未詳。大橋・中ノ橋ハ、木ニテ渡セリ。然ルヲ、康熙三十三年甲戌七月十三、四日、大風有テ、村中ニ夥シク潮揚リ、那覇ノ町、平地ニ白浪立（以下省略）

『由来記』の各項目の冒頭の叙述は、傍線を付した箇所にもるように

1 「抑、那覇ノ濫觴ヲ尋ルニ」、5 「当初、薩府之御手ニ入ケル印トテ」、2 「此三重城ハ」とそれぞれ異なる叙述であり一定していない。

それに対して、『旧記』は『由来記』の記述に特にそれに当たる文言がないにもかかわらず、叙述傍線を付したように34・35「往昔之世」とした年紀を記す叙述をし、36「往昔」は『由来記』の「往昔」をとるかたちで冒頭に年紀を記す叙述をしていることが分かる。^{（注12）}もちろん、年紀の叙述といつても「那覇記」の冒頭の項目は「往昔之世」や「往昔」というもので具体的ではないが、それが具体的である項目は、はっきりした年紀が記されている。しかも、付表3にあるように典拠をあげ

る項目でもそれに続いて年紀を記している記事がみられる（「5 御物奉行」の冒頭叙述「毛氏家譜曰。万曆二十一年」等）。このように『旧記』には、項目の冒頭に年紀や典拠をまず記す叙述の形式があるといえるのである。ちなみに、『古事集』にはまだこの叙述形式は意識されていないようで、「34 那覇」は「昔此村」（「那覇」「建置沿革」の項）、「35 唐船堀」は「昔于此地」（「那覇」「山川」「唐船堀」の項）、「36 三重城」は「此与屋良佐並崎雄藩左右」（「那覇」「閩梁」「三重城」の項）という叙述になっており、『旧記』のように一定の叙述形式ではない。『旧記』が整序された形式で記そうとしたのは、鄭秉哲が蔡温本『中山世譜』の第二次の附巻の編纂にも携わっていることから、この様な一定の形式で叙述しようとしたのではないか。呉論文では、「35 唐船堀」の叙述が『由来記』「5 唐船堀ノ事（附シアン橋ト云事）」と比べて、薩摩に関連した記事と中国に関連した記事の叙述の順序が入れ替わっていることを指摘して、『旧記』の編纂者は「中国を強く意識していた」と推測しているが、これは単純に「唐船堀」の地名起源譚に合わせるためのもので、項目の冒頭に年紀や典拠を記す叙述の形式を示したのと合わせて、鄭秉哲が『旧記』の叙述を整序したひとつとして理解する方がよい。『古事集』も『旧記』と同様の叙述になっている。いずれにしても、該当する『由来記』の項目の冒頭の叙述と比較すると、『旧記』は全般にわたって一定の叙述形式によって書かれているといえる。実は『旧記』がこの形式で叙述されていること

が、次の正史『球陽』とその外巻『遺老説伝』へ『旧記』が引用されることを容易にしたといえるのではないか。

「36 三重城」の記事は、『球陽』巻8—592「(尚貞王)二十七年、臨海堤並びに橋二座を改修す」に引用されている(付表2)。「尚貞王二十七年」は、『旧記』が記す「康熙三十三年」(一六九四)と一年ずれるが、『旧記』が記す年紀が基になって、『球陽』巻8—592の記事にこれが引かれていると推測される。また「35 唐船堀」は、『球陽』附巻2—73「(尚貞王)二十二年、始めて那覇の東の思案橋を塞ぐ」に引用されている。『球陽』附巻に引用されるのは、「又一説。嘗恐^三倭兵入国」。鑿^二斯池塘」という記述があるからであるが、『球陽』「(尚貞王)二十二年」(一六九〇)の記事に引かれるのは、『旧記』の叙述に具体的な年紀がないものの、『球陽』が「康熙庚申年間に至り、其の東橋を塞ぎ、一堤を築建して以て往来を通ず」と加筆した記事があるからだと思われる(ただし、「康熙庚申年間」は十年前の尚貞王十二年であるが)。さらには、「34 那覇」は『遺老説伝』巻1—9「那覇の地名由来のこと」に引かれる。これは、記事に具体的な年紀が記されていないために『遺老説伝』に引かれたと理解できる。このように、『旧記』はそれが記した年紀の叙述を基にして、あるいは加筆・改編されて『球陽』や『遺老説伝』に引かれているのである。

とりあえずの報告であるが、付表2・付表10にまとめたように『球陽』とその外巻である『遺老説伝』に引かれた『旧記』の記事は、三

七〇箇所程であり相当な数にのぼる。それも筆者の調査した範囲でいうと、巻一の「那覇記」42「荒神堂」が『球陽』巻8—600に、巻三の「50 施餓鬼」が『球陽』附録1—64他に引かれた八例の例外を除いて、『旧記』を引く『球陽』と『遺老説伝』の記事は、記名があるのはすべて鄭秉哲が記した記事である。^(注13)鄭秉哲は自らが記した『旧記』の記事を、『球陽』と『遺老説伝』に振り分けて記した感がある。特に『遺老説伝』については、『旧記』の巻一の「那覇記」をみると「34 那覇」が『遺老説伝』の巻1—9、「38 博奕屋」が『遺老説伝』の巻1—10(前段)、「50 平松地」が巻1—10(後段)、「55 泉崎」が巻1—11、「56 潮音寺」が巻1—12、「63 鉄縄石」が巻1—13、「64 牛町」が巻1—14、「65 辻蔵」が巻1—15、「66 地藏堂」が巻1—16、「68 八貫奴僕」が巻1—17というように、「遺老説伝」の排列が『旧記』の巻一の「那覇記」の排列に強く関連していることが分かる。同様の問題は、『旧記』の巻九「(宮古山記)」にもみられるが、『旧記』は『遺老説伝』の編纂にも影響しているのである。『旧記』はそういう意味で、『球陽』と『遺老説伝』を生む有力な資料のひとつであり、その編纂にも直接影響している書だといえる。

〈まとめ—『旧記』編纂の課題—〉

『旧記』巻一「72 上天妃廟」「73 龍王殿」「78 唐間森」の記事は、いずれも『由来記』巻九「唐栄旧記全集」を受けている記事であ

る。「唐榮旧記全集」(「康熙伍拾貳年」(一七一三))はこれらの記事を「遺老説伝」として叙述している。これが、いまのところ鄭秉哲等が編纂した『球陽』の外巻『遺老説伝』の初出であろう。^(注13)「遺老説伝」という語が、中国からの渡来人である唐榮が記した記事から出ていることが、まず確認される。『旧記』はそれを「遺老伝」とするが、「遺老説伝」を「遺老伝」とする例は、王府編纂事業の前任者ともいえる蔡溫が記した『中山世譜』(一二二五年)の「凡例十条」に「遺老説伝」がでて、本文でそれを「遺老伝」と記している例が既にある。秉哲は、その前例を踏襲したか。それはともかくとして、『旧記』の記事が『球陽』と「遺老説伝」に引用されている箇所は、前述したように筆者が調査した結果をみても三七〇箇所を数える。木村論文では「直接引用、及び改変されて引用されたものまで含めると」「四〇〇項目近く」あるという。^(注15)木村論文ではその箇所が具体的に示されていないのでなんともしえないが、また筆者に見落としがあることも考えられるが、この数の違いは筆者は「直接引用」を基本に数えているからだと思われる。いずれにしても、『旧記』は『球陽』と『遺老説伝』の有力な資料のひとつであったことは間違いない。『球陽』や『遺老説伝』の資料は、もちろん『旧記』ばかりではないが、本論でふれた伝承的な記事を多く記す姿勢を持つ『旧記』が、『球陽』や『遺老説伝』の有力な資料になっていることを考えると、『旧記』の叙述の姿勢が伝承的「歴史」を多く入れた『球陽』の性格を規定し、その延長に『遺老説伝』を生ん

だという大雑把な見通しを想定することができないのではないか。すなわち、伝承的な「歴史」を含み込む『球陽』の誕生は、編纂者と同じくする『旧記』を介して『中山世鑑』と蔡鐸・蔡溫の『中山世譜』という正史の叙述と、『由来記』『旧記』という地誌の叙述を総合した中から生まれたという展開を考えてよいのではないか。ただし、もう少し正確にいえば、『古事集』が『旧記』の基にあるということになる。例えば、『古事集』『麻姑島』(宮古島)の「古蹟」「鷹塚」は『旧記』には入らず、直接『遺老説伝』附巻134「宮古水納島の鷹塚由来のこと」に採られる記事になっている。同じく「人物」は『球陽』巻3-182「附宮古山の嘉場仁也、鯖魚に逢ひて命を救はる」に採られている。あるいは、『古事集』『唐榮府』の「人物」「蔡謙」は『球陽』巻2-89「(尚巴志王)十八年、蔡謙、亀鱷に命を救はる」の記事に、続いて記される「列女」「蔡氏之女」は『球陽』巻3-128「(尚円王三年)蔡謙の女亜佳度、資を捐して祠を建て、神主を奉安す」の記事になっている。あげた四例はいずれも鄭秉哲が記したという署名がある記事である。つまりは、『古事集』から『旧記』に採られず、『球陽』や『遺老説伝』に入る記事もあるわけで、『古事集』も含めて『旧記』という書を考えなければならぬということになる。それは、今後の課題である。

もうひとつの課題は、前述したように『由来記』から『旧記』への編纂にあたって、どのような叙述の変化があったのか、『旧記』が『由来記』のどのような項目や叙述を落とし、どのような項目や叙述を加

えたかを詳細に検討することがまず必要である。例えば、『旧記』卷三「事始」と対応するのは『由来記』卷三・四「事始 乾坤」であるが、『旧記』の八十七項目に対して『由来記』は卷三が七十五項目、卷四が八十八項目、都合一六三項目である。『旧記』は『由来記』の項目に対して「10 帯類」「32 学校」「44 贈位」等、十項目を新たに立てているだけだが、『由来記』の項目の八十六項目を削除している。この削除と加筆の検討は、『旧記』という編纂書がなにを記そうとしていたかを考える基本である。『旧記』卷三「事始」にあたる『古事集』はないのでこれについてはなんともいえないが、『由来記』から『旧記』への編纂の問題は、『古事集』の詳細な検討が必要になってくることはいうまでもない。『古事集』は波照間が指摘するように『由来記』と『旧記』の間にあるもので、本稿でも必要の範囲で言及したが、項目によっては『古事集』の段階で『旧記』の叙述に近い内容がみられるものとそうでない項目があり、全般にわたる『由来記』『古事集』『旧記』の比較検討が必要である。そして、『古事集』に鄭秉哲がかかわっているかまでを含めた検証が必要である。『旧記』は祭祀の執行の叙述を削除する傾向が強いが、これは前述したように『由来記』卷五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」や卷十二以下の「各処祭祀」の祭祀執行の記述が採られないことをさしている。しかし、『旧記』においても卷三

「公事」には割注のかたちで祭祀執行の叙述が記され、附卷十一「風俗」は新たな巻を立てるかたちで祭祀の叙述はある。これらを総合し

て考えると、『旧記』は神女の祭祀の叙述については関心が薄い、男性官人の祭祀の記述は一定程度記そうとする姿勢が窺える。祭祀の叙述についても、なお詳細な検討が必要かもしれない。『由来記』から『旧記』への編纂の詳細な検討は、これからの課題である。

注

注1 拙論『琉球国由来記』卷三・四「事始」乾坤について―特に、『中華事始』『大和事始』の引用に関連して―（論集刊行委員会『琉球の歴史と文化』本邦書籍、一九八五年刊）。

注2 高良倉吉『琉球王国の構造』吉川弘文館、一九八七年刊。

注3 拙論『おもろさうし』の神女」（『おもろさうし』と琉球文学』笠間書院、二〇一〇年刊）。

注4 球陽研究会『球陽解説』（『球陽』研究会『球陽』角川書店、一九八二年刊）。

注5 なお、鄭秉哲の「乾隆七年」家譜記事にみえる「王妃姫紀」の「改正」はどのような書の「改正」をいうのか興味深い。また、「乾隆二十一年」（一七五六）の家譜記事にみえる「王時諸事及七司公務之考」も国王に「呈覽」された書であるようだが、これもどのような書であるのか、知りたいところである。この書については、『球陽』「遺老説伝」をともに編んだ蔡安謨と見解が異なり、後にそれを訴えているようであるが、このことにも興味が持たれる。

注6 呉論文は『旧記』は由緒の明らかなものは正巻に収載し、不明なものには附巻に収載、もしくは切り捨てられる場合がある。『旧記』は全体的に由緒の明白さを基準にして、構成を整理しようとしている痕跡が見られる」と指摘している。

注7 拙論『琉球国由来記』の世界認識』『文学』季刊第九卷三号、岩波書店、一九九八年刊。

注8 『由来記』にも尸解仙をめぐる記事は、巻13「1 ヨクツナノ嶽」に

記された「ヨクツナ大屋子」の記事、巻14「212—1 旧跡」に記された「補陀落坊主」の記事がある。

注9 拙論「琉球神道記」にかかわる「琉球言説」(立教大学日本学研究年報)第十二号、二〇一四年刊。

注10 伊波普猷は、『琉球史料叢書』の『旧記』の「解説」で「由来記の解説で詳述した通り、少々手間取るが、とにかく由来記でも出来る。さうすると、肝腎な祭祀並に、供物の事を全然闕いて、祭祀の比較研究に役立たない旧記は、由来記より遙に、価値が落ちるといふことになる」と記している。『旧記』の研究が乏しいことを考えると、この認識は後世まで影響したと思われる。

注11 注7に同じ。

注12 なお、『旧記』の「36 三重城」には「康熙三十三年甲戌」で改行されている。この改行は『琉球史料叢書』本において年紀等を中心にみられるが、これは「例言」に示されるように編者(横山重)が施したものだと考えられる。

注13 『球陽』巻8—600の記事の記名は「梁」とあるもので、梁焯が記したと判断されるもの、附巻1—64の記名は「毛」とあり「毛如苞」と判断される。この外『旧記』巻二の「知行」(82—87)は、『球陽』に引かれていると思われるが、「梁」と「毛」の署名の記事である。

注14 小峯和明「遺老伝」から『遺老説伝』へ『文学』季刊第九卷三号、岩波書店、一九九八年刊。

注15 木村淳也学位請求論文『球陽外巻 遺老説伝』本文と研究」二〇一〇年度所収、「第二部 遺老説伝本文の特性と背景」第一節 巻一、巻二の特性—宮古島関連記事を中心に—。

注16 田名真之「首里王府の史書編纂をめぐる諸問題「球陽」編集を中心に」(『沖縄近世史の諸相』ひるぎ社、一九九二年刊)では、『球陽』に様々な資料が使われていることが指摘されている。

引用文献

- ・横山重他『琉球国旧記』(『琉球史料叢書』第三卷) 東京美術、一九七二年刊。
- ・外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』角川書店、一九九七年刊。
- ・球陽研究会『球陽』角川書店、一九七四年刊。
- ・嘉手納宗徳『球陽外巻 遺老説伝』角川書店、一九七八年刊。
- ・沖縄県教育委員会『蔡鐸本中山世譜』沖縄県教育委員会、一九七三年刊。
- ・沖縄県教育委員会『蔡温本中山世譜 正巻』沖縄県教育委員会、一九八六年刊。
- ・沖縄県教育委員会『蔡温本中山世譜 附巻』沖縄県教育委員会、一九八七年刊。
- ・那覇市企画部市史編集室『那覇市史 家譜資料(二) 久米村系』那覇市企画部市史編集室、一九八〇年刊。
- ・小島環禮『神道大系 神社編 沖縄』神道大系編集会、一九八二年刊。
- ・沖縄県立芸術大学附属研究所『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇Ⅱ) 民俗・宗教』沖縄県立芸術大学附属研究所、二〇〇六年刊。

本稿は、平成二十四年度から五年間にわたって交付される予定の学術振興会科学研究費助成金基盤研究(C)、研究課題名「『琉球国由来記』『琉球国旧記』を中心とする琉球王府編纂事業の基礎的研究」の助成を受けた研究成果である。

付表凡例

- ・本付表は、横山重編『琉球史料叢書』第三巻『琉球国旧記』角川書店、一九七二年刊、外間守善・波照間永吉編『定本 琉球国由来記』角川書店、

一九九七年、球陽研究会『球陽』角川書店、一九七四年刊、嘉手納宗徳編
訳『球陽外巻 遺老説伝』角川書店、一九七八年刊を使用して作成した。
付表に記した番号は、それらによっている。

・付表1の「由」は『琉球国由来記』の略号である。
・付表の「備考」に*で記した注は、『旧記』を中心にした『由来記』との
大きな違いを記している。

付表1 『琉球国由来記』と『琉球国旧記』の巻の構成

『琉球国旧記』		『琉球国由来記』	備考（『由来記』との対応関係）
卷1	首里・泊・那覇・唐栄	王城之公事	首里は由巻5・6・12、泊は由巻7、那覇は由巻8、唐栄は巻9
卷2	官職・廃官・知行	官爵列品	由巻2
卷3	公事	事始 乾	由巻1
卷4	事始	事始 坤	由巻3・4
卷5	古城・関梁	城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀	
卷6	島尻・中頭・国頭	国廟・玉陵	由巻12 13
卷7	寺社	泊村由来記	由巻10 11
卷8	久米嶋・馬齒山・葉壁山	那覇由来記	由巻18 19・16
卷9	宮古山・八重山	唐栄旧記全集	由巻20 21
卷10		諸寺旧記	
卷11		密門諸寺縁起	
卷12		各処祭祀一（真和志・豊見城他、六間切）	
卷13		各処祭祀二（南風原・大里他、五間切）	
卷14		各処祭祀三（西原・浦添他、九間切）	
卷15		各処祭祀四（恩納・金武他、七間切）	
卷16		各処祭祀五（伊江島・伊平屋島）	
卷17		各処祭祀六（粟国島・渡名喜島・鳥島）	
卷18		各処祭祀七（座間味・渡嘉敷間切）	
卷19		各処祭祀八（具志川・仲里間切）	
卷20		各処祭祀九（宮古島）	
卷21		各処祭祀十（八重山島）	
附巻1	神殿		由巻12 14・18
附巻2	神軒		由巻12 15
附巻3	嶽・森・威部		由巻5・（8） 12・15・19・18・17・16・21・20
附巻4	泉井		

附卷5	江港	由卷2
附卷6	官職	由卷2
附卷7	官爵	由卷5・12・16・19・18・17
附卷8	火神	由卷9・11
附卷9	鐘銘	郡邑長は由卷2
附卷10	郡邑・郡邑長・駅	
附卷11	風俗	

付表2 『琉球国旧記』巻1の構成

『琉球国旧記』		『琉球国由来記』との対応箇所		備考、「旧記」の冒頭叙述他		『球陽』『遺老説伝』の引用箇所	
首里							
1 中山城	卷3―1 城	年紀「太古之世」	年紀「大古之世」	『球陽』卷1―13 鄭			
2 国殿	卷3―11 宮殿	年紀「天孫氏」	年紀「天孫氏」	『球陽』卷1―173（前段） 鄭	鄭、卷4―218（後段） 鄭		
3 北殿	卷3―11 宮殿 附	年紀「成化年間」	年紀「成化年間」	『球陽』卷3―179（前段） 鄭			
4 南殿	卷3―11 宮殿 附	年紀「天啓年間」	年紀「天啓年間」	『球陽』附卷1―26 無			
5 世誇殿	卷3―11 宮殿 附	典拠「古老伝」	典拠「古老伝」	『遺老説伝』1―1 鄭			
6 附 地理記	卷3―13 榜門	年紀「宣徳3年」	年紀「宣徳3年」	『球陽』卷2―83（前段） 鄭	鄭、卷4―233（後段） 鄭		
7 坊楼	卷3―13 墳墓	年紀「弘治14年」	年紀「弘治14年」	『球陽』卷3―166 鄭			
8 玉陵	卷6―2 玉陵地理記	年紀「崇禎年間」	年紀「崇禎年間」	『球陽』卷10―688（後段） 鄭			
9 附 地理記	卷5―10 真玉城ノ御嶽、卷5―6 キヤウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ	* 附に典拠「遺老伝」を加筆。		『球陽』卷7―457 無			
10 東宮	卷5―19 ソノヒヤブノ御イベ	年紀「康熙年間」。		『球陽』卷6―421 鄭			
11 真玉城嶽首里森威部	卷12―36 内金城之大嶽	年紀「順治17年」		『球陽』卷6―342 鄭			
12 園比屋武嶽	卷12―37 同小嶽	年紀「昔日」		『球陽』卷1―14 無			
13 美連嶽	卷5―22 キミコイシ嶽	年紀「往昔之世」		『遺老説伝』卷2―94 鄭			
14 内金城大嶽	卷5―33 山崎ノ嶽						
15 内金城小嶽	卷5―35 雨乞ノ嶽						
16 君恋嶽	卷5―36・37 晃大嶽・同小嶽ノ御イベ						
17 山崎嶽	卷5―41 アスイ森ノ御イベ	年紀「昔」		『球陽』卷3―177 鄭			
18 雨乞嶽				『遺老説伝』卷1―23 鄭			
19 晃嶽 二嶽							
20 早飯嶽							

21	西森威部	卷5—44	西森ノ御イベ	年紀「順治14年」	『球陽』附卷1—54 鄭
22	京阿波根塚	卷5—24	真和志森	年紀「嘉靖年間」	『球陽』卷3—188 鄭
23	腓城威部	卷5—23	腓城	年紀「成化5年」	『球陽』卷2—122（前段） 鄭
24	同楽苑	卷5—25	龍潭	年紀「康熙年間」	
25	龍潭	卷4—30	画工		『球陽』卷4—256 鄭
26	自了				
泊邑記					
27	国廟	卷6—1	国廟地理記	年紀「或曰宣德年間」「一說成化年間」	『遺老説伝』附卷130 鄭
28	附地理記	卷7—1	泊村由來記	年紀「昔時之世」	『球陽』卷9—652 鄭
29	泊御殿	卷7—1	泊村由來記	年紀「昔代」	『球陽』卷9—643 鄭
30	泊前街	卷7—1	泊村由來記	年紀「往昔」	『遺老説伝』卷1—18 鄭
31	赤平路	卷7—1	泊村由來記	年紀「昔」	『球陽』卷2—117 鄭
32	十貫瀬	卷7—2	泊大阿母由來之事	年紀「成化2年」	
33	泊地頭並大阿母				
那覇記					
34	那覇	卷8—1	那覇由來記	年紀「往昔之世」	『遺老説伝』卷1—9 鄭
35	唐船堀	卷8—5	唐船堀ノ事	年紀「往昔之世」	『球陽』附卷2—73 鄭
36	三重城	卷8—2	三重城且大橋・中橋・沖道、修理之事	年紀「往昔」	『球陽』卷8—592 鄭
37	中三重城	卷8—3	中三重城ノ事	年紀「往昔之世」	
38	博奕屋	卷8—7	バクチャノ事	年紀「昔」。*尚円王伝承を略す	『遺老説伝』卷1—10（前段） 鄭
39	御物城	卷8—9	御物城ノ事	年紀「昔」	『球陽』卷3—134 鄭
40	夷堂	卷8—11	夷殿ノ事	典拠「諺」	『球陽』卷3—198 鄭
41	硫黄城	卷8—13	硫磺城ウガミノ事	年紀「往昔之世」	『球陽』卷8—540 鄭
42	荒神堂	卷8—14	荒神堂ノ事	年紀「自昔」	『球陽』卷8—600 梁
43	楞伽寺	卷8—15	楞伽寺旧跡	年紀「昔」	『球陽』卷9—656 鄭
44	西照寺	卷8—16	西照寺旧跡	年紀「昔」	『球陽』卷7—467 鄭
45	薬師堂	卷8—17	薬師堂旧跡	年紀「往昔之世」	『球陽』卷7—458 鄭
46	地藏堂	卷8—10	那覇地藏ノ事	年紀「往昔之日」	『球陽』卷4—204 鄭
47	木屋地	卷8—20	木屋ト云事	年紀「昔」	『球陽』卷4—470 鄭
48	天神堂	卷8—21	天神建立之事	典拠「薛氏家譜」	『球陽』卷4—210 鄭
49	湯屋	卷8—22	湯屋ノ前ト云事	年紀「昔」	『遺老説伝』附卷129 鄭
50	平松地	卷8—24	平松ノ下トイフ事	年紀「昔」	『遺老説伝』卷1—10（後段） 鄭
51	新村渠植戊土樹	卷8—25	若狭町村之内小名新村渠並コハデスノ事	年紀「昔」	『球陽』卷6—422 鄭

52	夷堂	卷8―27	同所（若狭町村）夷殿ノ事	年紀「昔」	〔球陽〕卷7―494 鄭
53	湧田	卷8―31	湧田ノ事	年紀「昔」	〔球陽〕卷9―647 鄭
54	地蔵堂	卷8―32	湧田地蔵ノ事	年紀「昔」	〔球陽〕卷4―204（後段） 鄭
55	泉崎	卷8―33	泉崎ノ事	年紀「昔」	〔遺老説伝〕卷1―11 鄭
56	潮音寺	卷8―34	潮音寺旧跡	年紀「昔」	〔遺老説伝〕卷1―12 鄭
57	威部竈	卷8―36	イベガマノ事	年紀「昔」。*神女の祭祀記事を略す	〔球陽〕卷2―100 無
58	飯屋	卷8―38	御在番奉行御飯屋・御付衆宿ノ事	年紀「崇禎4年」	〔球陽〕附卷1―30 鄭
59	横目館	卷8―39	覺府ヨリ横目宿ノ事	年紀「康熙37年」	〔球陽〕附卷2―87 鄭
60	足輕館	卷8―40	足輕宿ノ事	年紀「康熙38年」	〔球陽〕附卷2―84 鄭
61	那覇里主公館	卷8―41	那覇里主、並同ジ宿ノ事	年紀「昔」	〔球陽〕卷5―295 鄭
62	古場津笠	卷8―8	コバヅカサノ事	年紀「往昔」	〔球陽〕卷9―619 鄭
63	鉄縄石	卷8―4	屋良佐森ノ沖ニクサリ瀬ノ事	年紀「昔」	〔遺老説伝〕卷1―13 鄭
64	牛町	卷8―44	西村之内ニ小名アリ	年紀「往昔之世」	〔遺老説伝〕卷1―14 鄭
65	辻蔵	卷8―44	西村之内ニ小名アリ	年紀「往昔之世」	〔遺老説伝〕卷1―15 鄭
66	地蔵堂	卷8―26	若狭町地蔵ノ事	年紀「昔」	〔遺老説伝〕卷1―16 鄭
67	辻・中島、二邑	卷8―29	辻・中島ノ事	年紀「往昔之世」	〔球陽〕卷7―452 鄭
68	八貫奴僕	卷8―44	西村之内ニ小名アリ	年紀「往昔之世」	〔遺老説伝〕卷1―17 鄭
69	魚塘	卷8―12	那覇ノ町魚小堀ノ事	年紀「万暦年間」	〔球陽〕卷4―236 鄭
唐宋記					
70	唐栄	卷9―1・2・3		年紀「大明洪武25年」	〔球陽〕卷6―322 無
71	下天妃廟	卷9―4	下天妃廟	典拠「遺老伝」	〔球陽〕卷2―76 鄭
72	上天妃廟	卷9―5	上天妃廟	典拠「遺老伝」	〔球陽〕卷2―77（後段） 鄭
73	龍王殿	卷9―6	龍王殿	年紀「竊案先王 尚巴志永楽20年」	
74	天尊廟	卷9―7	天尊堂	年紀「竊案先王 尚巴志永楽20年」	
75	天使館	卷9―8	天使館	年紀「竊案先王 尚巴志永楽20年」	
76	迎恩亭	卷9―9	迎恩亭	典拠「遺老伝」	〔球陽〕附卷2―72 鄭
77	内金宮森	卷9―10	内金宮嶽	典拠「遺老伝」	〔遺老説伝〕卷1―20 鄭
78	唐間森	卷9―12	唐間森	年紀「万暦38年」	〔球陽〕卷6―381 鄭
79	普門寺	卷9―14	普門寺村	年紀「康熙22年」	〔球陽〕卷7―453 鄭
80	至聖廟	卷9―15	孔子廟	年紀「康熙22年」	〔球陽〕卷8―569 鄭
81	関帝王廟	卷9―16	関帝廟	年紀「康熙57年」	〔球陽〕卷12―721 鄭
82	啓聖祠				

付表3 『琉球国旧記』 卷2の構成

『琉球国旧記』		『琉球国由来記』との対応箇所	『琉球国旧記』の冒頭叙述他	『球陽』『遺老説伝』の引用箇所
官職	1 国相	卷2―1 摂政	典拠「(中山)世鑑」	『球陽』卷7―473(後段) 鄭
	2 按司部	卷2―2 按司部	典拠「(中山)世鑑」	『球陽』卷3―195 鄭
	3 法司官	卷2―3 三司官三員	年記「康熙年間」	『球陽』卷3―155(前段) 鄭
	4 御物座	卷2―4 御物座	典拠「毛姓家譜曰。万曆21年」	『球陽』卷4―240 鄭
	5 御物奉行	卷2―6 御物奉行	典拠「(中山)世鑑」	『球陽』卷2―108 鄭
	6 御鎖側	卷2―8 御鎖之側	典拠「毛姓家譜曰。万曆35年」	『球陽』卷4―212(前段) 鄭、
	7 御双紙庫理	卷2―9 御双紙庫裡	典拠「向姓家譜曰。万曆45年」	『球陽』卷7―502(後段) 鄭
	8 平等側	卷2―10 平等之側	典拠「吳姓家譜曰。成化2年」	『球陽』卷4―257 鄭
	9 泊地頭	卷2―11 泊地頭	年記「順治2年」	『球陽』卷2―118 鄭
	10 御物奉行吟味役	卷2―7 御物奉行吟味役三員	年記「順治2年」	『球陽』卷5―306 鄭、卷6―
	11 申口吟味	卷2―12 申口吟味役三員	年記「順治2年」	『球陽』卷5―306 鄭
	12 日帳主取	卷2―13 評定書日帳主取	年記「康熙10年」	『球陽』卷7―445 鄭
	13 里之子	卷2―15 里之子	年記「昔」	『球陽』卷6―383 鄭
	14 筑登之	卷2―16 筑登之	年記「往昔」	『球陽』卷6―415 鄭
	15 赤八卷	卷2―17 赤八卷	典拠「英姓家譜曰。天啓8年」	『球陽』卷5―281 鄭
	16 総山奉行	卷2―18 總山奉行	典拠「題奏全抄(言上写)曰。崇禎6年」	『球陽』卷8―551 鄭
	17 山奉行	卷2―19 山奉行三員	年記「康熙年間」	『球陽』卷8―560 鄭
	18 御系図奉行	卷2―20 系図奉行	年記「康熙29年」	『球陽』卷6―331(後段) 鄭
	19 御系図中取	卷2―21 同中取三員	典拠「日記曰。順治14年」*「雍正7年」を加筆	『球陽』卷7―446 鄭
	20 総横目	卷2―22 總横目	年記「康熙10年」*「雍正7年」を加筆	『球陽』卷5―280 鄭
	21 大与頭	卷2―23 三平等大与頭	典拠「馬姓家譜曰。天啓7年」	『球陽』卷5―271 鄭
	22 御書院親方	卷2―24 御書院親方部	典拠「翁姓家譜曰。天啓2年」	『球陽』卷6―318(前段) 鄭
	23 御書院当官	卷2―25 同当役三員	年記「順治18年」	『球陽』卷7―490(後段) 鄭
	24 御茶道	卷2―26 御茶道	典拠「毛姓家譜曰。天啓3年」	『球陽』卷5―274(前段) 鄭
	25 御右筆主取	卷2―27 御右筆主取	典拠「題奏全抄(言上写)曰順治13年」	『球陽』卷7―515(後段) 鄭
	26 御右筆	卷2―26 御右筆三員	典拠「当座式録曰。天啓5年」	『球陽』卷5―277 鄭
	27 御振舞奉行	卷2―29 御振舞奉行	年記「康熙8年」	『球陽』卷7―425 鄭
	28 算用奉行	卷2―30 算用奉行		
	29 高奉行	卷2―31 高奉行		

30	寺社奉行	卷2―32	寺社奉行	典拠「馬姓家譜曰。康熙6年」。 *「雍正7年」を加筆	〔球陽〕	卷8―531	鄭
31	石奉行	卷2―33	石奉行・34	典拠「葛姓家譜曰。嘉靖41年」。 *「近世」を加筆	〔球陽〕	卷4―217	鄭
32	鍛冶奉行	卷2―35	鍛冶奉行	年紀「万暦年間」	〔球陽〕	卷4―264	鄭
33	瓦奉行	卷2―36	瓦奉行	典拠「汪姓家譜曰。万暦年間」	〔球陽〕	卷4―234	鄭
34	金奉行	卷2―37	金奉行	典拠「毛姓家譜曰。万暦25年」	〔球陽〕	卷4―239	鄭
35	貝摺奉行	卷2―38	貝摺奉行	典拠「毛姓家譜曰。万暦40年」	〔球陽〕	卷4―254	鄭
36	螺赤頭奉行	卷2―39	螺赤頭奉行	典拠「翁姓」家譜曰。万暦17年。 *「雍正7年」を加筆	〔球陽〕	卷4―237	鄭
37	当官	卷2―40	当役	典拠「金姓」家譜曰。嘉靖30年	〔球陽〕	卷4―206	鄭
38	勢頭	卷2―41	勢頭役	典拠「蔡姓家譜曰。正徳年間」	〔球陽〕	卷3―155	鄭
39	平等大屋子	卷2―42	平等大屋子三員	典拠「葛姓」家譜	〔球陽〕	卷3―196	鄭
40	御典業	卷2―43	御典業	年紀「崇禎10年」。 *「順治8年」を加筆	〔球陽〕	附卷1―50	鄭
41	御別当	卷2―44	御別当	典拠「題奏全抄（言上亨）曰。順治12年」	〔球陽〕	卷6―328	鄭
42	那覇里主	卷2―45	那覇里主	典拠「毛姓」家譜曰。嘉靖7年	〔球陽〕	卷4―199	鄭
43	御物城	卷2―46	御物城	典拠「蔡姓」家譜曰。嘉靖年間	〔球陽〕	卷4―207	無
44	久米村惣役	卷2―47	久米村惣役	典拠「遺老伝。成化年間」	〔球陽〕	卷3―133	鄭
45	大夫	卷2―48	紫大夫・49	典拠「家譜曰。成化元年」。 *「往昔」「近世」を加筆	〔球陽〕	卷2―114	鄭
46	長史	卷2―51	長史	典拠「唐榮公案曰。洪熙元年」	〔球陽〕	卷2―80	鄭
47	都通事	卷2―52	都通事	典拠「家譜云。正統4年」	〔球陽〕	卷2―89	鄭
48	講談師並読書師				〔球陽〕	卷7―485	鄭
49	漢字御右筆	卷2―53	漢字筆者	年紀「往昔」。 *「雍正六年」を加筆	〔球陽〕	卷11―817	鄭
50	総官	卷2―57	総官	年紀「自往昔」。 *加筆あり	〔球陽〕	卷9―666	鄭
51	大台所大屋子	卷2―72	大台所	年紀「昔日」	〔球陽〕	卷6―386	鄭
52	曆通事	卷2―54	曆通事	年紀「成化元年」	〔球陽〕	卷7―469	鄭
53	若秀才	卷2―56	若秀才	年紀「昔日」	〔球陽〕	卷6―387	鄭
54	大和横目	卷2―58	大和横目	典拠「経姓」家譜曰。崇禎年間。	〔球陽〕	附卷1―42	鄭
55	評定所筆者主取	卷2―60	評定所筆者主取	年紀「康熙7年」	〔球陽〕	卷6―412	鄭
56	御包丁	卷2―64	御包丁三員	典拠「遺老伝」	〔球陽〕	卷6―345	鄭
57	御物奉行帳当	卷2―67	御物奉行帳当	年紀「康熙10年」	〔球陽〕	卷7―447	鄭
58	御料理座	卷2―73	御料理座	典拠「匡姓」家譜曰。康熙17年	〔球陽〕	卷7―484	鄭
59	御道具	卷2―74	御道具	年紀「康熙8年」	〔球陽〕	卷7―431	鄭
60	仕上座	卷2―80	仕上座	年紀「万暦39年」 （万暦38年）	〔球陽〕	附卷1―9	鄭
61	船手	卷2―79	船手	年紀「前代」	〔球陽〕	卷10―676	鄭
62	取納奉行	卷2―88	島尻方代官	年紀「往昔」	〔球陽〕	卷11―814	鄭
63	地頭代	90	国頭方代官	年紀「万暦39年」	〔球陽〕	卷4―252	鄭
		91	中頭方代官				
			久米方代官				

87	86	85	84	83	82	知行	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	廃官
長史兩員	平等之側並泊地頭	御双紙庫理	御鎖之側	御物奉行三員	御書院親方部並当官		金庫理	御殿勢頭	石大勢頭	当頭	国頭山奉行	浮得奉行	砂糖惣奉行	三奉行主取	宮古主部	大下司御物奉行	百次御鎖之側	中頭御鎖之側	美御殿御藏御鎖之側	大台所御鎖側	文字	自奥渡上之扱理	首里大親	異国奉行	
卷2—131	卷2—129	卷2—128	卷2—127	卷2—126	卷2—124		卷2—123	卷2—122	卷2—121	卷2—120	卷2—119	卷2—118	卷2—117	卷2—116	卷2—115	卷2—114	卷2—113	卷2—112	卷2—111	卷2—110	卷2—109	卷2—108	卷2—107	卷2—106	
長史兩員	平等之側・泊地頭	御双紙庫理	御鎖之側	御物奉行三員	御書院親方部・125 同当役		金庫理	御殿勢頭	石大勢頭	当頭	国頭山奉行	浮得奉行	砂糖惣奉行	三奉行主取	宮古主部	大下司御物奉行	百次御鎖之側	中頭御鎖之側	美御殿御藏御鎖之側	大台所御鎖側	文字	自奥渡上之扱理	首里大親	異国奉行	無于今官職・御藏之事
年紀「順治14年」	年紀「崇禎15年」	年紀「崇禎15年」	年紀「崇禎15年」	年紀「崇禎15年」	年紀「康熙28年」		典拠「(顯姓)家譜曰。天啓6年」	典拠「(和姓)家譜曰。崇禎4年」	典拠「(和姓)家譜曰。天啓2年」	典拠「(毛姓)家譜曰。万曆45年」	典拠「(毛姓)家譜曰。万曆45年」	典拠「(宣姓)家譜曰。万曆45年」	年紀「順治19年」	典拠「(毛姓)家譜曰。隆慶元年」	典拠「(毛姓)家譜曰。万曆年間」	典拠「(仲姓)家譜曰。嘉靖43年」	典拠「(毛姓)家譜曰。天啓2年」	典拠「(楊姓)家譜曰。万曆32年」	典拠「(金姓)家譜曰。崇禎4年」	典拠「(黃姓)家譜曰。万曆年間」	典拠「(葛姓)家譜曰。天啓2年」	典拠「(毛姓)家譜曰。嘉靖18年」	典拠「(毛姓)家譜曰。嘉靖年間」	典拠「(馬姓)家譜曰。順治11年」	
〔球陽〕卷5—332 梁	〔球陽〕卷5—305 梁	〔球陽〕卷5—305 (後段) 毛	〔球陽〕卷5—305 (前段) 梁	〔球陽〕卷5—305 (前段) 梁	〔球陽〕卷8—552 梁		〔球陽〕卷5—279 鄭	〔球陽〕卷5—288 鄭	〔球陽〕卷5—270 鄭	〔球陽〕卷4—259 鄭	〔球陽〕卷6—389 鄭	〔球陽〕卷4—258 鄭	〔球陽〕卷6—347 鄭	〔球陽〕卷4—264 鄭	〔球陽〕卷6—320 鄭	〔球陽〕卷4—220 鄭	〔球陽〕卷5—269 鄭	〔球陽〕卷4—243 鄭	〔球陽〕卷5—287 鄭	〔球陽〕卷4—235 鄭	〔球陽〕卷5—268 鄭	〔球陽〕卷4—203 鄭	〔球陽〕卷4—228 鄭	〔球陽〕卷6—327 鄭	

付表4 『琉球国旧記』 卷3の構成

『琉球国旧記』		『琉球国由來記』との対応箇所	『琉球国旧記』の冒頭叙述他	『球陽』『遺老説伝』の引用箇所
公事	1 正月	1 a 正月	典拠「由來記」。*「遺老伝」を加筆、「中華事始」を略す	『球陽』 卷1—11 鄭
	2 禁城米蒔	1 元日米蒔	年紀「窃案。洪武25年」*「周書」（不明）「倭俗歌」（不明）を略す	『球陽』 卷1—52（後段） 鄭
	3 掛瑞簾	2 御簾掛	典拠「世譜」	『遺老説伝』 卷1—7 鄭
	4 献二水	3 刃土之御水且吉方御水献上	典拠「遺老伝」。*「中華事始」を略す	『球陽』 卷1—54 鄭
	5 奏楽	4 楽器飾並音楽		
	6 献御佳例御盆	5 御佳例御盆 89 除夜御年玉餅並御嘉例御盆	典拠「窃案。遏達理双紙」	『球陽』 卷5—278 鄭
	7 杜参	6 杜参	典拠「窃案。遏達理双紙」	
	8 御印開	7 御印披	*「謹言上」を略す	『遺老説伝』 卷1—6（後段） 鄭
	9 朝賀	8 朝拝御規式	年紀「往昔」	
	10 御照堂拝礼	9 御照堂御拝 78 御照堂御拝	*78の「中華事始」「日本歳時記」を略す	
	11 南殿賀礼	10 出御於南風御殿 11 出御於下庫理	年紀「往昔之世」	『球陽』 卷6—365（前段） 鄭、卷12—861（後段） 鄭
	12 毎月朔望朝見	12 毎月朔日・十五日		
	13 献御佳例盆	13 初御年日	年紀「往昔」	『球陽』 卷6—404 鄭
	14 三番出日	14 三番出日		
	15 御印並御剣飾	15 御印飾並御美腰	年紀「前代」	『球陽』 卷7—456 鄭
	16 正月初三日幸行於三寺	16 三月初行幸		
	17 僧献配帙	17 配帙献上		
	18 人日	18 七日節供	年紀「昔日」。*「中華事始」「日本歳時記」を略す	『球陽』 卷7—438（一部） 鄭
	19 正月十一日	19 十一日 51 御祈念 67 御祈念	年紀「往昔之世」。*20の「日本歳時記」を略す	『球陽』 卷7—455 鄭
	20 御参詣	20 御参詣	典拠「題奏全抄云。順治元年」	『球陽』 卷7—507 鄭
	21 甲子祈福	21 御甲子御祈念	典拠「由來記云。弘治5年」	『球陽』 卷11—822（前段） 鄭
	22 甲子日拝礼	22 於王城御甲子御拝	典拠「勢頭双紙云。天啓年間」	『球陽』 卷11—822（後段） 鄭
	23 刃土今帰仁並知念玉城祈願	23 刃土今帰仁知念玉城御タカベ	典拠「窃案。勢頭古案」	『球陽』 卷12—916 鄭
	24 恵日拝礼	24 恵日御拝		
	25 百人物参	25 百人御物参		
	26 竈清	26 御竈清		
	27 二月王幸於久高島	27 行幸于久高島	年紀「往昔」	『球陽』 卷7—463（前段） 鄭

28	麦穂祭 春秋祭祀	36	*「中華事始」を略す	
29	長月御崇 彼岸	37	*「願文」を略す	『球陽』 卷12―915 鄭
30	上巳	38	*「日本歳時記」を略す	
31	彼岸	39	*「前代之世」。*「日本歳時記」「塵添塩囊抄」を略す	『球陽』 附卷2―67 鄭
32	麦大祭	40		
33	四品物参	41		
34	四度物参	42		『球陽』 卷12―915 鄭
35	換衣	43		『球陽』 卷12―915 鄭
36	山留	44		
37	四月行幸於知念玉城	45	年紀「自古」	『球陽』 卷7―867 鄭
38	畔弘	46		
39	御翰書授差使	47	*「大和事始」を略す	
40	御翰書授差使	48	*「日本歳時記」「続齊諧記」「塵添塩囊抄」「大和事始」を略す	
41	端午節	49		
42	端午節	50		『球陽』 卷12―862 鄭
43	稲穂祭	51	年紀「往昔之世」	
44	迎接勅書	52	年紀「自古」。*「雍正7年」を加筆。	
45	大世開閉	53		
46	稲大祭	54		
47	年浴	55	*「下学集」を略す	
48	聖誕	56		
49	七夕	57	*「日本歳時記」を略す	『球陽』 卷12―859（前段）・860 鄭
50	施餓鬼	58	年紀「昔」	『球陽』 附卷1―64 毛
51	忌日	59	*「礼記」（不明）を略す	
52	年忌	60	*「大和事始」を略す	
53	八月十五日夜	61		『球陽』 卷12―902 鄭
54	赤飯丘登	62		
55	指柴日	63		
56	九月麦初種子日	64	典拠「鄧氏家譜序」	『球陽』 卷7―464 鄭
57	播稻日	65		
58	九月幸于普天満山	66		
59	粟初種	67	年紀「順治元年」	『球陽』 附卷1―47 無
60	上表	68		

61	賜宴貢使（俗称御茶飯）	75	渡唐衆御茶飯
62	新早植並向早植	76	十一月新早植
63	冬至	77	冬至
64	御状開	79	御状開
65	仏名会	81	仏名会
66	鬼餅	82	鬼餅
67	払煤（俗称寸寸美知）	83	掃煤之事（俗ニス、ミチト云）
68	賀歳暮	84	歳暮
69	歳末御年日	85	歳末之御年日
70	暮冬僧献配帙	86	歳末配帙献上
71	天界寺並各杜年籠	87	天界寺年籠
72	御身葉民許願	88	御身葉民御願
		宮宮年籠	

付表5 『琉球国旧記』 卷4の構成

『琉球国旧記』		『琉球国由来記』との対応		備考 『旧記』の冒頭叙述他	『球陽』『遺老説伝』の引用箇所
1	水田・陸田	卷3天地門	2 田・陸田	典拠「遺老説」。*「中華事始」「大和事始」を略す	『球陽』卷2―90（前段）
2	里数	卷3天地門	4 道地理	年紀「永楽年間」。*「中華事始」を略す	『球陽』卷2―90（後段）
3	井	卷3天地門	5 駅	年紀「永楽年間」。*「中華事始」「大和事始」を略す	無
4	堤	卷3天地門	7 井	年紀「大古之始」。「中華事始」を略す	
5	橋	卷3天地門	8 堤	*「大和事始」を略す	
6	皮弁冠	卷3衣服門	9 冠	年紀「景泰3年」。*「中華事始」「大和事始」を略す	『球陽』卷3―197（前段）
7	帕	卷3衣服門	15 冠	年紀「太古之世」。*「中華事始」を略す	『球陽』卷4―260（中段）
8	簪	卷3衣服門	15 冠	年紀「正徳4年」。*「中華事始」を略す	『球陽』卷3―174 鄭
9	衣	卷3衣服門	16 簪	年紀「天孫之世」。*「中華事始」他を略す	『球陽』卷5―309（前段）
10	帶類	卷3衣服門	17 衣服	年紀「上古之世」。*「中華事始」「大和事始」を略す	『球陽』卷6―423（前段）
11	米麦	卷3動植門	21 五穀	年紀「万曆39年」。*「中華事始」「大和事始」他を略す	『球陽』卷1―3 鄭
12	木綿	卷3動植門	24 木綿	典拠「遺老伝」。*「大和事始」他を略す	『球陽』附卷1―21 鄭
13	田芋	卷3動植門	25 田芋	年紀「万曆33年」	『球陽』附卷1―27 鄭
14	蕃薯	卷3動植門	26 蕃薯	典拠「遺老伝」。*「大和事始」他を略す	『球陽』卷4―244 鄭
15	烟草	卷3動植門	29 烟草	*「大和事始」を略す	『球陽』附卷1―22 鄭
16	蚕	卷3動植門	30 蚕事	*「大和事始」を略す	『球陽』附卷1―20 鄭
17	塩	卷3飲食門	33 塩	典拠「遺老伝」。*「中華事始」「大和事始」を略す	『球陽』附卷2―79 鄭

52	瓦工	卷4人事門	34	瓦工	年紀「天啓七年」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕附卷1—25 無
51	烟花戲	卷4人事門	34	火花	年紀「弘治2年」 典拠「古老伝」。 *「大和事始」を略す	〔球陽〕卷5—273 鄭
50	螺點	卷4人事門	33	貝摺師	年紀「崇禎9年」	〔球陽〕卷6—364 鄭
49	燒玉	卷4人事門	32	玉燒	年紀「康熙9年」	〔球陽〕卷7—425 鄭
48	袂綃	卷4人事門	31	表具	年紀「順治年間」 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷1—17 (前段) 鄭
47	画師	卷4人事門	30	画工	年紀「崇禎年間」。 *「大和事始」を略す	〔球陽〕卷2—107 (後段) 鄭
46	地理	卷4人事門	29	風水	年紀「康熙6年」。 *「康熙47年」を加筆	〔球陽〕卷1—56 鄭
45	相士	卷4人事門	28	人相	年紀「康熙16年」	〔球陽〕附卷1—56 鄭
44	贈位	卷4人事門	27	医	年紀「天啓元年」 年紀「康熙6年」	〔球陽〕卷7—493 鄭
43	医道	卷4人事門	20	喪	年紀「洪武年間」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷5—275 鄭
42	三年喪	卷4人事門	19	宗廟	年紀「密案。洪武年間」。 *「雍正3年」を加筆	〔球陽〕附卷1—50 鄭
41	宗廟	卷4人事門	15	片髮	典拠「修造宗廟文。順治年間」	〔球陽〕卷3—137 (一部) 無
40	敬聲	卷4人事門	11	版簿	典拠「中山世譜」	〔球陽〕卷6—393 鄭
39	版籍	卷4人事門	7	誓	典拠「尚氏家譜曰。崇禎9年」	〔球陽〕卷1—183 鄭
38	世誓	卷4人事門	5	曆	年紀「成化元年」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕附卷1—33 鄭
37	曆	卷4人事門	2	姓	年紀「洪武年間」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷8—563 鄭
36	殉死	卷4人事門	75	翰書	年紀「舜天王・英祖王・察度王之世」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷3—17 (後段) 鄭
35	姓	卷3文教門	74	書	年紀「萬曆年間」	〔球陽〕卷1—17 (後段) 鄭
34	翰書	卷3文教門	68	文字	年紀「大荒之際」。 *「虞書舜典」(不明)を略す	〔球陽〕卷1—17 (後段) 鄭
33	入監読書	卷3文教門	67	巡狩	年紀「(中山)世鑑」。 *「大和事始」を略す	〔球陽〕卷7—425 鄭
32	学校	卷3文教門	66	巡察使	年紀「康熙8年」。 *「大和事始」を略す	〔球陽〕卷1—17 (後段) 鄭
31	文字	卷3典制門	65	交隣国	年紀「永樂年間」。	〔球陽〕卷1—21 (前段) 鄭、卷1—160 (後段) 鄭
30	巡狩	卷3典制門	64	遣使於中国	年紀「洪武2年」。 *「大和事始」を略す	〔球陽〕卷1—17 (前段) 鄭
29	巡察使	卷3典制門	63	諸島朝貢	年紀「景定5年」。 *「大和事始」を略す	〔球陽〕卷1—17 (前段) 鄭
28	進貢中国	卷3典制門	62	調役	年紀「古老伝。天孫氏之世」。 *「大和事始」を略す	〔球陽〕卷2—107 (後段) 鄭
27	諸島來貢	卷3典制門	61	賞賜	典拠「夏氏家譜」。 *「大和事始」を略す	〔球陽〕卷1—17 (前段) 鄭
26	調役	卷3典制門	60	刑法	典拠「遺老伝。上古之世」。 *「大和事始」を略す	〔球陽〕卷1—17 (前段) 鄭
25	賞賜	卷3典制門	47	雨傘	年紀「天啓七年」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷1—25 無
24	刑罰	卷3器財門	45	砂糖	年紀「成化元年」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷1—25 無
23	雨傘	卷3器財門	44	附五方旗	年紀「成化元年」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷1—25 無
22	涼傘	卷3器財門	44	茶	年紀「成化元年」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷1—25 無
21	黑砂糖	卷3飲食門	44	茶	年紀「成化元年」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷1—25 無
20	茶	卷3飲食門	44	茶	年紀「成化元年」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷1—25 無
19	茶	卷3飲食門	44	茶	年紀「成化元年」。 *「中華事始」を略す	〔球陽〕卷1—25 無

[illegible]

付表6 『琉球国旧記』 卷5の構成

『琉球国旧記』	『琉球国由来記』との対応箇所	備考 『琉球国旧記』の冒頭叙述他	『球陽』『遺老説伝』の引用箇所
古城 1 山南城 2 山北城 3 米次城 4 瀬長城 5 勝連城 6 仲城		年紀「延祐年間」 年紀「延祐年間」 典拠「俗諺」 典拠「俗説」 年紀「天順年間」 年紀「往昔之世」	『遺老説伝』卷2―92 鄭 『遺老説伝』卷1―24 鄭 『球陽』卷2―106（一部）、107（一部） 鄭 『球陽』卷2―106（一部） 鄭
関梁 7 世持橋 8 安里橋 9 指帰橋 10 真玉橋 11 太平橋 12 金城橋 13 板敷橋 14 宇平橋 15 勢理客橋 16 臨海橋 17 石火石橋 18 泊高橋 19 宮城橋 20 庇謝橋		年紀「順治18年」 年紀「景泰3年」 年紀「自古」 年紀「万曆25年」 年紀「自古」 年紀「往昔之世」 年紀「昔」	『球陽』卷6―346 鄭 『球陽』卷2―98 鄭 『遺老説伝』卷1―19 鄭 『球陽』卷9―648 鄭 『球陽』卷4―241 鄭 『球陽』卷7―479 鄭 『球陽』卷8―559 鄭 『球陽』卷8―561 鄭 『球陽』卷8―587 鄭 『球陽』卷9―625 鄭 『球陽』卷12―868 鄭

付表7 『琉球国旧記』 卷6の構成

『琉球国旧記』		『琉球国由来記』との対応箇所	備考	『球陽』『遺老説伝』の引用箇所
島尻				
1	崇元寺嶽	卷12―25 崇元寺之嶽	年紀「成化年間」	『球陽』卷3―137 無
2	茗刈子祠堂	卷12―38 銘刈子祠堂	年紀「昔」。 *「上天」以降を略す	『球陽』卷3―150 鄭
3	豊見瀬嶽・ 穂花嶽・平良瀬嶽	卷12―82 城内豊見瀬嶽 ホバナ嶽 84 ヒラ、ス嶽	*「崇ノ意趣」を略す	
4	取稻穂以献按司 (在佐敷郡津波古 邑)	卷13―304 309 外間之殿から 安次富之殿	年紀「往昔之世」	
5	献麦稻穂 (在真和志郡識名 邑)	卷12―43 城アタリ之殿	年紀「往昔之世」。 *「御崇意趣」を略す	
6	小岡碑	卷12―42 指帰橋北方小岡碑文	年紀「往昔之世」	『球陽』卷3―179 (後段) 鄭
7	真嘉戸井		年紀「往昔之世」	『遺老説伝』卷1―50 鄭
8	箕隅宮	卷12―179 メイノスミノ事	年紀「往昔之世」	『遺老説伝』附卷139 鄭
9	住吉宮	卷12―180 住吉大明神	年紀「往昔之世」。	『球陽』附卷1―55 鄭
10	土地君	卷12―181 土地公	年紀「康熙37年」	『球陽』卷9―620 鄭
11	中瀬杜宮	卷12―182 中瀬	年紀「康熙28年」	『球陽』卷9―629 鄭
12	善縄嶽	卷13―1 ヨクツナノ嶽	年紀「昔」	『遺老説伝』卷1―42 鄭
13	上間殿	卷13―40 上間之殿		『遺老説伝』卷1―33 鄭
14	浜殿	卷13―56 浜ノ御殿	年紀「昔日」	『遺老説伝』附卷133 鄭
15	友盛嶽	卷13―60 友盛ノ嶽御イベ	年紀「昔」	『遺老説伝』卷1―34 鄭
16	久場堂嶽	卷13―64 コバダウノ嶽	年紀「昔日」	『遺老説伝』卷1―34 鄭
17	稲嶺殿	卷13―146 稲嶺之殿	年紀「昔」	
18	佐久間殿	卷13―177 佐久間之殿	年紀「昔日」	
19	嘉手志川	卷12―272 嘉手志川	年紀「昔」	
20	真壁神社	卷12―331 神社	年紀「昔」。 *「先年」以下を「附」として記す	『球陽』卷2―84 (後段) 鄭
21	宮里嶽	卷12―332 宮里嶽	年紀「中古之世」	『球陽』附卷2―69 鄭
22	鬼洞	卷13―100 1 旧跡	年紀「往昔之世」	
23	馬天巫火神	卷13―298 パテン巫火神	年紀「往昔之世」	
24	津波古不行稻祭礼	卷13―304 外間之殿	年紀「往昔之世」	『遺老説伝』卷1―52 鄭
25	中森嶽	卷13―319 中森ノ嶽	典拠「俗諺」	『遺老説伝』卷1―51 鄭
26	内川田	卷13―323 知念城内之殿	年紀「上古之世」	

27	種稲田地	卷13―386	中森嶽 小嶽之御イベ	年紀「上古之世」	〔球陽〕卷4―209 鄭
28	王農大比屋	卷12―392 59	奥之大ヒヤ之殿	年紀「昔」。 *加筆あり	〔球陽〕卷4―209 鄭
中頭					
29	奇洲神社	卷14―209	神社	年紀「昔日」	〔遺老説伝〕卷1―53 鄭
30	安里社宮	卷14―210	神社	年紀「昔日」	
31	津瀾神社	卷14―211	神社	年紀「往昔」	
32	和仁屋間神社	卷14―212	神社	年紀「往昔之世」	
33	糸蒲寺	卷14―212 1	旧跡	年紀「昔日」。 *「遺老伝」を加筆	〔遺老説伝〕卷1―57 鄭
34	恵帽子井嶽	卷14―13	エボシガワノ嶽	年紀「昔」	〔球陽〕卷8―568 鄭
35	友盛嶽	卷14―77	トモリ嶽	典拠「遺老伝」	〔遺老説伝〕附卷135 鄭
36	寄明森	卷14―83	ヨリアゲ森	年紀「往昔」	〔遺老説伝〕卷1―54 鄭
37	古重嶽	卷14―92	古重嶽	年紀「往昔之世」	〔遺老説伝〕卷2―67 鄭
38	経塚	卷14―95 1	旧跡	年紀「昔日」	〔球陽〕卷3―190 鄭
39	仲間邑種稲忌日	卷14―97	浦添城内殿	年紀「中古之世」	〔遺老説伝〕卷1―55 鄭
40	金宮寄上森	卷14―128	コガネミヤヨリアゲ森	典拠「遺老伝」	〔遺老説伝〕卷1―56 鄭
41	無漏溪				
42	轟溪				
43	古洞				
44	御衣脱瀬	卷14―35	御衣脱瀬		〔遺老説伝〕卷2―65 鄭
45	内間東西二殿	卷14―36	内間御殿 両殿有	年紀「昔日」	〔球陽〕卷3―123（一部） 鄭
46	勝連郡儀保掟				〔球陽〕卷8―553（前段） 鄭、卷9―637（後段） 鄭
国頭					
47	公房嶽	卷15―129	コバウノ嶽	年紀「往昔之世」	〔遺老説伝〕卷1―25 鄭
48	炬港	卷15―168 1	旧跡の末尾部	年紀「成化年間」	〔球陽〕卷3―149 鄭
49	観音堂	卷15―233	観音	年紀「康熙27年」	〔球陽〕卷8―549 鄭
50	宜名間旧宅	卷15―312	旧跡	年紀「昔」	〔球陽〕卷3―136（後段） 鄭
51	泊比屋旧宅				
52	健堅大親			年紀「昔」	〔球陽〕卷1―50 鄭

付表8 『琉球国旧記』 卷7の構成

『琉球国旧記』		『琉球国由來記』との対応箇所		『琉球国旧記』の冒頭叙述他		『球陽』『遺老説伝』の引用箇所	
神社							
1	天徳山円覚寺 弁財天女堂 荒神堂	卷10―1―21 卷10―7 卷10―2	天徳山円覚寺附法堂 肇創弁財天堂記附重修事 肇建荒神堂記附重修事	年紀「弘治5年」 年紀「弘治15年」 年紀「弘治5年」		『球陽』卷3―154（前段）鄭 『球陽』卷3―167（前段）鄭	
2	福源山天王寺	卷10―22―30	福源山天王寺	年紀「成化年間」。	*「近世」を加筆		
3	妙高山天界寺	卷10―31―39	妙高山天界寺	年紀「景泰年間」		『球陽』卷2―116 鄭	
4	靈徳山崇元寺併国廟	卷10―40―44	靈徳山崇元寺	年紀「成化年間」			
5	天徳山龍福寺	卷10―45―50	天徳山龍福寺	年紀「咸淳年間」			
6	太平山安国寺	卷10―51―54	太平山安国寺	年紀「景泰年間」		『球陽』卷8―547（後段）鄭	
7	万歳嶺慈眼院	卷10―55―57	万歳嶺慈眼院	年紀「万曆46年」		『球陽』卷7―468 鄭	
8	浮亀山照太寺	卷10―66―68	浮亀山照太寺	年紀「嘉靖年間」		『球陽』附卷1―19 鄭	
9	達磨峰西來院	卷10―69―70	達磨峰西來院	年紀「景泰年間」		『球陽』附卷1―40 鄭	
10	靈芝山建善寺	卷10―71―73	靈芝山建善寺	年紀「景泰年間」		『球陽』附卷1―12 鄭	
11	万年山広厳寺	卷10―74―77	万年山広厳寺	年紀「景泰年間」		『球陽』卷5―283 無	
12	壺宝山長寿寺天照大明	卷10―78―79	壺宝山長寿寺	年紀「遺老伝」		『球陽』卷2―98 鄭、卷7―427 鄭	
13	波上山三社	卷11―1―13	波上山護国寺	年紀「往昔」		『球陽』卷3―184 鄭、卷7―427 鄭	
14	護国寺	卷11―7	波上山三光院護国寺	年紀「往昔」		『球陽』卷1―37 鄭、卷8―532 鄭	
15	荒坂堂	卷11―9	末社	年紀「昔」			
16	大日如来堂	卷11―9	末社	年紀「嘉靖3年」		『球陽』卷8―609 鄭	
17	対面石	卷11―9	末社	年紀「往昔」		『球陽』卷8―609 鄭	
18	龍峰山祥雲寺並権社	卷10―58―62	龍峰山祥雲寺	年紀「昔」		『球陽』卷4―251 鄭	
19	観音堂	卷10―61	正観音堂	年紀「万曆39年」		『球陽』卷9―628 鄭	
20	南海山桃林寺併社	卷10―63―65	南海山桃林寺	年紀「往昔之世」		『球陽』附卷1―14（前段）鄭、卷8―604（後段）鄭	
21	冲山三社並臨海寺	卷11―14―16	冲山臨海寺	年紀「往昔之世」		『球陽』卷7―506 鄭	
22	高明山杜併神徳寺	卷11―19―26	八幡神徳寺	年紀「天順年間」		『球陽』卷2―110 鄭	
23	姑射山三社併神応寺	卷11―27―31	姑射山神応寺	年紀「往昔之世」		『球陽』卷7―501 鄭	
24	大慶山万寿寺並三社	卷11―32―36	大慶山万寿寺	年紀「景泰年間」		『球陽』卷2―110 鄭	
25	天久山三社併聖現寺	卷11―37―41	天久山聖現寺	年紀「成化年間」		『遺老説伝』附卷14 鄭	
26	普天満山三社並神宮寺	卷11―42―45	普（天）間神宮寺	年紀「成化年間」		『遺老説伝』卷1―35 鄭	
27	金峰山三社並観音寺	卷11―46―47	金峰山観音寺	年紀「嘉靖年間」		『球陽』附卷1―59 鄭	
28	光明寺	卷11―49	薩州光明寺	年紀「康熙21年」		『球陽』附卷2―70 鄭	
29	頂峰院薬師如来	卷11―50	頂峰院薬師如来	年紀「天順年間」		『球陽』附卷2―70 鄭	
30	東松山大日寺	卷11―51	東松山大日寺	年紀「順治年間」		『球陽』附卷1―65 鄭	

付表9 『琉球国旧記』 卷8の構成

『琉球国旧記』		『琉球国由来記』の対応箇所	『琉球国旧記』の冒頭叙述他	『球陽』『遺老説伝』の引用箇所
久米嶋記				
1 具志川城	卷19―1―a	（具志川城主由来）の前半	年紀「往昔之世」	『球陽』卷3―172 鄭
2 笠末茶良旧宅	卷19―1―a	（具志川城主由来）の後半	年紀「昔」	『遺老説伝』卷1―47 鄭
3 伊敷索嶽	卷19―48	イシキナハ御嶽	年紀「昔」	『遺老説伝』卷1―48 鄭
4 仲里城	卷19―50	仲里城御嶽	年紀「昔」	『遺老説伝』卷1―49 鄭
5 登武那覇嶽	卷19―58	トンナハ御嶽	年紀「昔」	
附	88	堂之大比屋物語之事		
馬齒山				
6 船蔵嶽	卷18―34	船蔵御嶽	年紀「往昔之世」	『遺老説伝』卷1―26 鄭
7 伊保崎	卷18―36	上マタ御嶽	年紀「往昔之世」	『遺老説伝』附卷131 鄭
葉壁山				
8 金丸王旧宅	卷16―66	金丸王加那志御屋敷		『球陽』卷3―135 鄭
9 親田	卷16―67	玉城ヒヤ	年紀「昔」	『球陽』卷3―136 鄭
10 玉陵	卷16―68	玉御殿	年紀「昔」	『球陽』卷8―543 鄭
11 泉井				

付表10 『琉球国旧記』 卷9の構成

『琉球国旧記』		『琉球国由来記』の対応箇所		『球陽』『遺老説伝』の引用箇所	
(宮古山記)					
1 漲水嶽	卷20―1	漲水御嶽	并財天女	年紀「上古之世」	『遺老説伝』卷2―68 鄭
2 広瀬嶽	卷20―2	広瀬嶽		年紀「昔」	『遺老説伝』卷2―69 鄭
3 大城嶽	卷20―3	大城御嶽		年紀「昔」	『遺老説伝』卷2―70 鄭
4 中間嶽	卷20―4	中間御嶽		年紀「昔」	『遺老説伝』卷2―71 鄭
5 新城嶽	卷20―5	新城御嶽		年紀「昔」	『遺老説伝』卷2―72 鄭
6 船立嶽	卷20―10	船立御嶽		年紀「昔」	
7 山立嶽	卷20―12	山立御嶽		年紀「昔」	
8 池農嶽	卷20―13	池ノ御嶽		年紀「昔」	
9 嶺間嶽	卷20―15	嶺間御嶽		年紀「昔」	
10 真玉嶽	卷20―21	真玉御嶽		年紀「昔」	

11	喜佐真嶽	卷20―23	年紀〔昔〕	〔遺老説伝〕卷2―74 鄭
12	乗瀬嶽	卷20―24	年紀〔昔〕	〔遺老説伝〕卷2―75 鄭
13	比屋地嶽	卷20―25	年紀〔昔〕	〔遺老説伝〕卷2―76 鄭
14	泊嶽	卷20―27	年紀〔昔〕	〔遺老説伝〕卷2―77 鄭
15	瓦瀬嶽	卷20―28	年紀〔昔〕	〔遺老説伝〕卷2―78 鄭
八重山記				
16	宮屋島嶽	卷21―1	年紀〔弘治年間〕	〔遺老説伝〕卷2―81 鄭
17	美崎嶽	卷21―3		
18	名蔵嶽	卷21―5		
19	水瀬嶽	卷21―6		
20	白石嶽	卷21―7		〔遺老説伝〕附卷140 鄭
21	崎原嶽	卷21―14	年紀〔昔〕	〔遺老説伝〕卷2―82 鄭
22	仲嵩嶽	卷21―15	年紀〔昔〕	
23	山崎嶽	卷21―16		
24	外本嶽	卷21―17		
25	嘉手刈嶽	卷21―18		
26	真和志嶽	卷21―19		
27	多原嶽	卷21―20	年紀〔昔〕	〔遺老説伝〕卷2―83 鄭
28	波座間嶽	卷21―34		
29	仲筋嶽	卷21―35		
30	幸本嶽	卷21―36		
31	久間原嶽	卷21―37		
32	花城嶽	卷21―38	年紀〔昔〕	
33	波里若嶽	卷21―39		
34	国仲根所	卷21―40		〔遺老説伝〕卷2―79 鄭
35	遠波高根所	卷21―75		
36	真德利嶽	卷21―76		
37	白郎原嶽	卷21―77	年紀〔弘治年間〕	
38	阿幸俣嶽	卷21―78		
39	八重山公倉	卷21―78―2		
40	八重山造船	卷21―78―1	年紀〔往昔〕	〔遺老説伝〕卷2―80 鄭